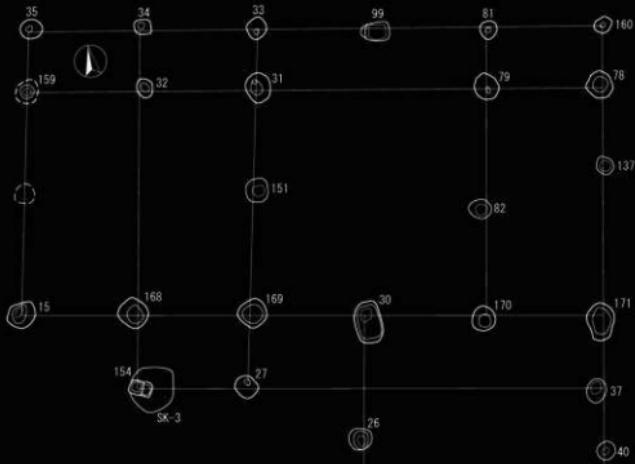


釜神町遺跡

(第16地点)

—共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2018

水戸市教育委員会

釜 神 町 遺 跡

(第 16 地点)

—共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 1 8

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。そして、私たちの祖先もこの豊かな自然のもと生活を営んできました。

釜神町遺跡が立地する天王町一帯は千波湖を望む台地上にあり、江戸時代は水戸城下の武家屋敷地が広がっていた地域の一つで、現在も往時の景観を色濃く伝える閑静な住宅街であります。本市ではこのような、水戸らしい風情、情緒、たたずまいを醸し出す歴史的景観を、歴史的資源として位置づけ、天下の魁、水戸にふさわしい風格ある歴史まちづくりを進めております。

こうした歴史的資源のなかでも、発掘調査等の学術情報の蓄積は年々増加の一途を辿り、本市の豊かな歴史的資源の知的基盤となっています。

さて、このたびの発掘調査は、集合住宅建設工事に際して、平成29年度に実施したものです。

調査の結果、江戸時代初期から幕末まで、幾度かの建て替えを経ていたことが判明するなど、武家屋敷に関する豊かな知見を得ることができました。

また今回の調査は、江戸時代の武家屋敷の変遷が確認された、市内でも初めての報告例でもあり、本書にはこのような水戸藩の武士の生活や暮らしを伺い知る最新の学術的成果が盛り込まれております。

ここに刊行いたします本書が、学術研究等の資料のみならず、水戸の誇りである歴史遺産を生かしたまちづくりの機運の一助となり、郷土の歴史を再認識されるきっかけとなりますことを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び本書の刊行にあたり、多大な御理解と御協力を賜りました事業者大岩信二様、積水ハウス株式会社水戸支店、地域住民の皆様には末筆ながら心から感謝申し上げ、ごあいさつの言葉といたします。

平成30年2月

水戸市教育委員会
教育長 本多 清峰

例 言

1 本書は、大岩信二氏による共同住宅建設に伴う釜神遺跡（第16地点）の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、水戸市教育委員会の指導のもと、事業主より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所が行った。

3 調査の概要は下記の通りである。

所 在 地 茨城県水戸市天王町872

調 査 面 積 335 m²

調 査 期 間 平成29年7月25日 から 平成29年8月20日 まで

調査主体者 株式会社日本窯業史研究所（代表取締役 菅間裕二）

調 査 指 導 新垣清貴（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター主幹）

調査担当者 水野順敏（株式会社日本窯業史研究所 日本考古学協会々員）

調査参加者 石橋美智代、稲田桃子、鶴志田紗鈴、坂場光雄、清水昊、田村政子、平根幸子、平根優輝

4 本書は、水野、新垣、菅口慶久（水戸市埋蔵文化財センター所長）が分担して執筆し、新垣の指導のもと、水野が編集した。遺構・遺物のトレース、編集は菅間智子の協力を得た。

5 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管している。

6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・各位より御指導・御協力を賜った。御芳名を記して深く謝意を表する（敬称略・順不同）。

大岩信二、河野一也、佐々木義則、土生朗治、林邦雄、山下守昭、
茨城県教育庁総務企画部文化課、関東文化財振興会㈱、積水ハウス㈱、
ソワン・ド・フォルム

凡 例

1 本書に記している座標値は、世界測地系を用いている。挿図のうち、平面図の方位記号は座標北を、土層断面図の水準線高の数値は、海拔標高をそれぞれ示す（単位：m）。

2 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帳』（農林水産技術会議事務局・㈱日本色彩研究所色票監修 2008年版）に準拠する。

3 遺構平面図・土層断面図の縮尺は、1/40, 1/60, 1/80とし、各図にスケールを明示した。

4 遺構及び土層説明における略称は以下の通りである。

SI：堅穴建物跡、SB：掘立柱建物跡、P：小穴、SK：土坑、SX：性格不明遺構、

SE：井戸跡、K：擾乱、R：粒、B：塊、KP：鹿沼バミス、焼土：■、

凝灰質泥岩：■、酸化面：■

- 5 遺物実測図の縮尺は、1/2, 1/3, 1/4を使用し、各図にスケールを明示した。
遺物の計測数値は、cm及びgで示した。（　）内が推定値、〔　〕内が現存値を示す。
- 6 遺物番号は、遺構・遺物挿図、観察表、写真図版とも共通で、観察表左端の番号で示してある。
- 7 参考・引用文献は、一括して例言・凡例裏に収めた。

【参考・引用文献】

- 江原忠昭 1985 『改訂 水戸の町名』 水戸市役所
- 大岡敏昭 2009 『幕末下級武士の絵日記』 相模書房
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦 2008 「水戸市百合ヶ丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 関口慶久 2011 「第4章 発掘調査」『水戸市指定有形文化財 八幡宮拝殿及び幣殿保存修理工事報告書』宗教法人八幡宮
- 関口慶久 2011 「水戸城」『関東の名城を歩く 北関東編』 吉川弘文館
- 関口慶久 2015 「中・近世における水戸城の展開」第37回 茨城県考古学協会研究発表会 資料 茨城県考古学協会
- 豊島区遺跡調査会 1998 「陶磁器・土器 分類・計数基準」『伝中・上富士前II別刷』 豊島区遺跡調査会
- 堀口友一・伊東多三郎 1968 「城郭の拡張と城中制度」『水戸市史』中巻（1） 水戸市役所
- 水戸市教育委員会編 2004 『台渡里廃寺跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2006 『吉田古墳I』 水戸市埋蔵文化財調査報告第6集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2007 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』 水戸市埋蔵文化財調査報告第11集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2009a 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』 水戸市埋蔵文化財調査報告第22集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2009b 『吉田古墳III』 水戸市埋蔵文化財調査報告第23集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2010 『笠原水道』 水戸市埋蔵文化財調査報告第36集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2011 『平成20年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』 水戸市埋蔵文化財調査報告第43集 水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会編 2014 『水戸城跡発掘調査I』 水戸市埋蔵文化財調査報告書第61集 水戸市教育委員会
- (有)毛野考古学研究所 2014 『下り松遺跡』 結城市教育委員会

目 次

ごあいさつ 例言 凡例 参考・引用文献

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 基本土層	2
第2章 遺跡の周辺環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 釜神町遺跡における既往の調査	6
第3章 検出された遺構と遺物	7
第1節 古墳～平安時代	7
1. 概要	7
2. 壓穴建物跡	7
3. 土坑	7
第2節 近世以降	10
1. 概要	10
2. 掘立柱建物跡・小穴類	11
3. 土坑類	14
4. 性格不明遺構・その他の遺構	14
5. 出土遺物	16
第4章 釜神町遺跡の歴史的展開	25
はじめに	25
第1節 土地利用の概略	25
第2節 近世武家屋敷の展開	26
おわりに—課題と展望—	30
写真図版	
報告書抄録・奥付	

挿 図 目 次

第1図 調査地点位置図 (1 : 10,000)	第7図 SK-1・出土遺物
第2図 基本土層図	第8図 SB-1・5・6 平面・断面図
第3図 周辺遺跡分布図	第9図 SB-2・4・7 平面・断面図
第4図 釜神町遺跡 既往の調査地点 (1 : 8,000)	第10図 SB-3 平面・断面図
第5図 遺構配置図 (1 : 120)	第11図 SK-2・3・5・6・8A・B・10～13
第6図 SI-1・炉跡・出土遺物	第12図 SX-2～7・9, SE-1, P- 83A・B, K-8

- | | | | |
|------|---------------------|------|-------------------------|
| 第13図 | 近世以降出土遺物（1） | 第17図 | 近世Ⅲ期（18世紀後半～19世紀
中葉） |
| 第14図 | 近世以降出土遺物（2） | 第18図 | 遺跡周辺の町割（正保～明暦年間） |
| 第15図 | 近世Ⅰ期（17世紀前半～17世紀後半） | 第19図 | 遺跡周辺の町割（安政年間） |
| 第16図 | 近世Ⅱ期（17世紀後半～18世紀前半） | | |

表 目 次

第1表	主要な周辺遺跡一覧表	第6表	近世土坑類一覧表
第2表	釜神町遺跡 既往の調査地点一覧表	第7表	性格不明遺構・その他の遺構一 覧表
第3表	古墳～平安時代出土遺物観察表	第8表	出土遺物一覧表（1）（2）
第4表	近世以降出土遺物観察表		
第5表	小穴一覧表（1）（2）（3）		

写真図版目次

- 写真図版1 A. 調査区全景（東より） B. 調査前（南東より） C. 調査区全景（南西より） D. SI-1 完掘（南より） E. SI-1 確認状況（南西より） F. SI-1 土層（南西より） G. SI-1 炉跡確認時（南より） H. SI-1 炉跡火床（南より） I. SI-1 遺物出土状態（南西より） J. SI-1・P5 土層（西より） K. SK-1 完掘（南西より） L. SK-1 土層（南西より）
- 写真図版2 A. SB-1・5・6 完掘（東より） B. SB-1・P165 土層（北より） C. SB-5・P2 土層（北より） D. SB-2・4・7 完掘（東より） E. SB-2・P175A 土層（北より） F. P-22 土層（北より） G. SB-3 完掘（南西より） H. SK-2 完掘（東より） I. SK-2 遺物出土状態（東より）
- 写真図版3 A. SK-3 完掘（南より） B. SK-3 土層（南より） C. SK-5 完掘（南より） D. SK-6 完掘（南より） E. SK-8A 完掘（北より） F. SK-8B 完掘（南より） G. SK-8A 遺物近景（北より） H. SK-9A・B 完掘（南より） I. SK-9A・B 土層（北より） J. SK-10 完掘（北より） K. SK-10 遺物出土状態（南より） L. SK-10, 銭出土状態（西より） M. SK-11 完掘（北より） N. SK-11 土層（北より） O. SK-12A 完掘（東より） P. SK-12B 完掘（東より） Q. SK-12B 土層（西より） R. SK-13 完掘（東より）
- 写真図版4 A. SX-2 完掘（南より） B. SX-2 確認時（南より） C. SX-2 石材近景（南より） D. SX-2 土層（南より） E. SX-3 完掘（南より） F. SX-4 完掘（南より） G. SX-5 完掘（南より） H. SX-6・7 完掘（南より） I. SX-8 完掘（南より） J. SX-9 完掘（東より） K. SX-9 土層A・B'（南より） L. SX-9 土層A・A'（南より） M. SE-1 上部全景（南より） N. SE-1 石積近景（南より） O. SE-1 東側掘方（南より） P. K-8 完掘（北西より） Q. K-8 土層（北より） R. 基本土層（南より）
- 写真図版5 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成29年3月16日付けで、共同住宅建築工事に伴い、大岩信二（以下「事業者」という。）から水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」（教理第282号）の照会があった。

照会地である水戸市天王町872は、周知の埋蔵文化財包蔵地「釜神町遺跡」の範囲内に該当しており、遺構の存在が予想されるため、市教委の職員による現地踏査が実施された。その結果、近世以降の陶磁器片が採集できたため、既存建物の解体を待って市教委は試掘調査を実施した（釜神町遺跡第16地点第1次調査）。試掘調査の結果では近世以降の溝状遺構、土坑が多数確認された。

市教委は、遺跡の保存について、事業者と工法の変更に係る協議を実施した。協議の結果、地盤改良等が必要であるため、設計変更が困難であるとの結論に至った。

このような状況を踏まえ、市教委は平成29年3月23日付け教理第313号にて、茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて、文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」を提出した。これを受けて、県教委教育長から平成29年6月13日付け文第661号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が確認された場合にはその保存等について別途協議をする旨、勧告があつた。

勧告を受けて事業者は、平成29年6月16日株式会社日本窯業史研究所（以下「調査機関」という。）と発掘調査業務委託契約を締結するとともに、調査機関及び市教委と発掘調査実施に係る協定を締結した。調査機関は法92条第1項の規定により、平成29年6月30日付け「埋蔵文化財発掘調査の届出について」（教理第740号）を県教委教育長あて提出し、その後県教委教育長から調査機関へ平成29年7月10日付け文第893号「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」にて、適切に発掘調査を実施するよう指示があつた。

以上のような経過のもと、当該調査を釜神町遺跡第16地点第2次調査として、平成29年7月25日から平成29年8月16日にかけて発掘調査を実施することとなった。

（新垣）



第1図 調査地点位置図（1:10,000）

第2節 調査の方法と経過

調査区画は、開発予定地の形状に合わせた任意グリッドを設定し、調査終了後に公共座標（世界測地系第IX座標系）及び海拔標高と合致させた。任意グリッドはX軸をアルファベット、Y軸をアラビア数字で示し、4 m方眼を設定した。第5図は任意グリッドに公共座標を重ねたものである。

確認した遺構は、堅穴建物跡は十字、土坑・小穴類は半裁により土層を観察し、記録の後完掘して写真撮影を行った。写真撮影は、35 mm判のモノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。写真にはデータを記した黒板を写し込んだ。撮影には三脚及び大型脚立を使用した。平面実測は、全体を縮尺1/20で作成し、計測には光波距離計を使用し、手書きで方眼紙に作図した。土層図は縮尺1/20、炉跡等の微細図は縮尺1/10で作成、計測・作図とも手書きで行った。

平成29年7月22日に器材を搬入、同月25日より重機による表土除去に着手し、29日まで継続した。これと併行して25日より人力による遺構確認作業に入る。

西半部は遺構の分布密度が疎らであったが、東半部は密である。大部分は試掘の予想通り近世以降の遺構であるが、古墳時代の堅穴建物跡や平安時代の土坑も確認された。重複する近世の小穴等の調査・記録の後、堅穴建物跡の調査に入った。この間、7月27・28日、8月10日に市教委による視察があった。翌11日には、全景写真的撮影とともに市教委による調査終了確認を受ける。その後、補足調査や記録の補足を行い、同月20日に調査と器材撤収を終了した。

整理・報告書作成作業は、平成30年2月まで実施した。

第3節 基本土層

遺跡は、千波湖北岸の標高25 m程の台地上に位置する。現状ではほぼ平坦な宅地となっているが、地山面は僅かに東が高い。調査地は、近世以降、武家屋敷として利用されて来た。アジア・太平洋戦争末期の空襲によって建物が焼失し、その後再建された建物も昨今解体された。これにより、現地表面下40～50 cm程は層位の遺存状態が悪い。調査区北辺の鹿沼バミス層までの状態を図示した（第2図、図版4R、基本土層確認箇所は第5図参照）。



第2図 基本土層図

第2章 遺跡の周辺環境

第1節 地理的環境

茨城県は関東平野の北東部に位置し、水戸市はその東辺中程に所在する。市域の北部を流れる那珂川は、栃木県の那須連山を水源とし、八溝山地の西縁を南へ流れた後、那珂台地と東茨城台地との間を南東流して太平洋へと注ぐ。那珂川の流路には沖積低地が形成され、これに沿うように東茨城台地が東に向かって突出し、その東部は水戸台地と呼称される。水戸台地は支谷により四つに細分され、北西より上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地などと呼ばれる。

遺跡は那珂川と同支流の沢渡川・桜川の間を東西に延びる上市台地の南縁、標高25～26m付近に立地し、南方に千波湖を望む。調査地の西を流れて千波湖に注ぐ青川はかつて水戸城の外堀として利用されていた。

第2節 歴史的環境

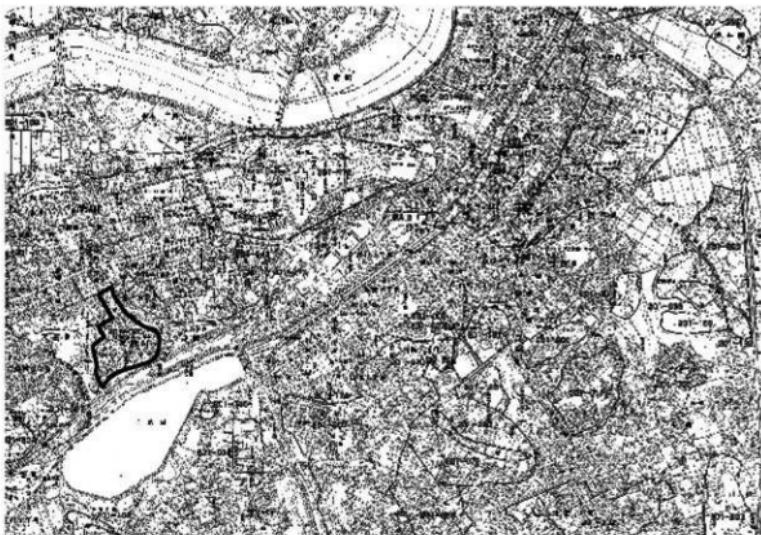
釜神町遺跡の立地する水戸台地には、縄文時代から近世にわたる遺跡が所在する（第3図、第1表）。ここでは、近隣の遺跡を中心に概観する。

旧石器時代 近隣に明確な調査事例は乏しいものの、採集遺物等に良好な資料の存在が知られており、該期における土地利用を示唆する（川口 2005, 2008）

縄文時代 上市台地では本遺跡が中期前葉から晚期の集落跡として知られる。千波湖の南の千波・吉田台地には、水戸南高校遺跡、吉田貝塚、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、下本郷遺跡、千波遺跡、薬王院東遺跡、柳崎貝塚等、早期～後晩期にわたる多数の遺跡が知られる。なお、吉田貝塚や柳崎貝塚のように縄文時代に限定される遺跡と、水戸南高校遺跡や大鋸町遺跡のように後の時期まで継続される遺跡とが見られる。

弥生時代 上市台地では東照宮境内遺跡が知られるのみで、吉田台地には水戸南高校遺跡、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、薬王院東遺跡など多く所在する。いずれも後期に形成された集落である。

古墳時代 該期の遺跡としては古墳（群）と集落跡がある。上市台地には東照宮境内古墳群、三の丸古墳、五軒町古墳群、愛宕山古墳などが知られる。国指定史跡の愛宕山古墳は全長136m以上の前方後円墳で中期に属する。千波・吉田台地には千波山古墳群や吉田古墳群などが所在する。国指定史跡の吉田古墳群1号墳は、多角形墳で大型切石による横穴式石室をもち、玄室の壁面には多数の線刻画が遺存し、7世紀前～中葉の所産と考えられる（水戸市教育委員会編 2006）。集落跡に目を向けると、本遺跡の第16地点（今次調査区）や水戸城二の丸の調査で前期の集落跡が確認されており、吉田台地の大鋸町遺跡やお下屋敷遺跡も該期の遺跡である。また、中期の集落跡は古式須恵器が出土した大鋸町遺跡が知られるのみである。後期の集落跡は前記の大鋸町遺跡の他お下屋敷遺跡、吉田神社遺跡、水戸南高校遺跡などがある。なお、市域における該期の集落跡は7世紀前半で一旦途絶える傾向を示し、7世紀後半には後に郡家が設置される台渡里地区周辺に集中す



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 主要な周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	現況	時代・時期						備考		
					旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
201-007	水戸南高校遺跡	白梅2丁目	集落跡	校地	○	○	○						埋誠
201-008	吉田貝塚	元吉田町井坂	貝塚	道路		○							
201-009	安楽寺遺跡	元吉田町安楽寺	集落跡	境内	○								
201-010	お下星敷遺跡	白梅2丁目	集落跡	校地	○	○	○	○	○				埋誠
201-011	大網町遺跡	元吉田町	集落跡	宅地	○	○	○	○	○				
201-012	下本郷遺跡	千波町下本郷	集落跡	宅地	○								
201-020	釜神町遺跡	偏前町	集落跡	宅地	○								
201-041	東照宮境内古墳群	官町2丁目	集落跡	境内			○						埋誠
201-072	吉田古墳群	元吉田町東組	古墳群	宅地	○		○						
201-075	千波山古墳群	千波町千波山	古墳群	公園									
201-076	東照宮境内古墳群	官町2丁目	古墳群	境内			○						埋誠
201-077	三の丸古墳	三の丸1丁目	古墳	宅地			○						名称変更、埋誠
201-078	五軒町古墳群	五軒町2丁目	古墳群	教会			○						埋誠
201-101	吉田城跡	元吉田町	城郭跡	境内					○				
201-103	横竹岡遺跡	柳町2丁目	城郭跡	宅地					○				名称変更
201-106	千波山遺跡	千波町千波山	集落跡	宅地	○								
201-128	樂王院東遺跡	元吉田町東組	集落跡	宅地	○	○	○						
201-142	鷹匠町遺跡	梅香2丁目	火葬墓	宅地			○						名称変更
201-146	柳崎貝塚	千波町柳崎	貝塚	宅地	○								
201-161	吉田神社遺跡	官内町	集落跡	境内		○	○	○					
201-172	水戸城跡	三の丸1丁目	城郭跡	学校				○	○	○			
201-174	笠原水道	笠原町	水道路	境内					○				
201-287	七面製陶所跡	常盤町1丁目	生産遺跡	山林					○				
201-290	東組遺跡	元吉田町東組	集落跡	宅地		○	○	○	○	○			
201-292	三ノ町遺跡	城東3丁目	包廻地	宅地							○	新規発見	
201-324	旧僧業園	常磐町1丁目	庭園跡	公園							○	新規発見	

る現象が指摘されている（水戸市教育委員会編 2004）。

奈良・平安時代 律令制下における当地は、常陸國那賀郡に属し、郡の政治・文化の中心たる郡家は国指定史跡台渡里官衙遺跡群に比定されている。郡庁院、正倉院に付属寺院を兼ね備えたもので、東方脇に古代の官道東海道の存在も想定される。該期の集落跡は、本遺跡や水戸城の二の丸・三の丸地区の他、吉田台地のお下屋敷遺跡、大郷町遺跡、薬王院東遺跡、東組遺跡など広範囲な集落跡の分布が見られる。なお、東に隣接する鷹匠遺跡では火葬墓の存在が知られる。

中世 12世紀末から13世紀初め頃に水戸城本丸付近に馬場資幹が居館を築き、応永33（1426）年に江戸通房がこれを奪取した。さらに、天正18（1590）年には佐竹義宣が取つて変わり、大規模な「水戸普請」を行い、現在の水戸城の祖型を形成したとされる。なお、水戸城の南西の低地には竹限城跡に比定される横竹隅遺跡、吉田台地の吉田城跡、集落跡の東組遺跡が所在する。

近世 慶長7（1602）年、関ヶ原の合戦における対応から佐竹氏は秋田へ移封となり、徳川家康の五男武田信吉が入部したが翌年嗣子無く病没し、十男頼将（後の頼宣）が入部する。慶長14（1609）年頼宣が駿府へ移封となり、十一男の頼房が入部し、水戸徳川家の祖となる。頼房は水戸城と城下を整備して二の丸に居館（御殿）を構えた。また、調査区の西を流れる青川を利用して大工町堀を設けて惣構（外堀）とし、当地は以來武家地として利用されてきた。元禄11（1698）年には2代藩主光圀によって二の丸に水戸彰考館が開設され、以後『大日本史』編さんの舞台となる。また、光圀は下市地区の水不足対策として笠原水道を敷設している。「神崎岩」と呼ばれる軟質の石材を加工した岩桶を用いた、延10.7kmに及ぶ長大なものである（水戸市教育委員会編 2010）。この神崎岩の採掘場（岩切場）の一部が本遺跡の南側崖下に残っている。9代藩主齐昭は天保12（1841）年三の丸に藩校弘道館を設立、翌天保13（1842）年には庭園・偕楽園を開園している。さらに、殖産興業の一環として偕楽園の崖下に陶器製陶所（七面製陶所）を設けるなどした。弘道館は敷地面積が10.5ヘクタールと日本最大の規模をもち、国指定特別史跡となっている。偕楽園は常磐公園として国の史跡・名勝に指定されている。

なお、水戸城跡においてはこれまで市教委、茨城県教育財團などにより60次以上に及ぶ試掘・発掘調査が重ねられ、種々の貴重な資料が得られている。殊に、水戸市立第二中学校の工事に伴う二の丸彰考館の調査では、水戸城の変遷を示す有益な知見とともに彰考館に関する膨大な資料が得られた（水戸市教育委員会編 2014）。

また、釜神町遺跡では、後述の如く小規模な調査が多いものの、第4地点から黒地蒔絵箱物と見られる漆器が出土するなど、武家地の片鱗を窺わせる（水戸市教育委員会編 2011）。

近代 明治以降も当地は前代の土地利用のまま後裔の士族が居住する例が多かったようである。しかし、昭和20年8月2日、未明の所謂水戸大空襲によって市街地の90%程が焼失し、当該地区もほとんどが焼けたと伝えられる。これ以降、居住者の変動があったようであるが、近隣は後裔の方々の居住が目立つ。

第3節 釜神町遺跡における既往の調査

本遺跡においては、平成29年10月現在で19地点27次に及ぶ調査が実施されている（第4図、第2表）。約半数が個人住宅、他も共同住宅等に伴う小規模な試掘調査が主体で、本調査が実施されたのは僅かに4地点に過ぎず、それぞれの調査成果は第2表に記した如くである。

第2・12・17・18地点など遺跡の南側では縄文時代、北西の第2・16地点では古墳～平安時代の遺構が確認され、近世の遺構は遺跡全体に分布すると見られる。（水野）



第4図 釜神町遺跡 既往の調査地点（1:8,000）

第2表 釜神町遺跡 既往の調査地点一覧表

地点番号	次数	調査箇所	調査年月日		遺構	遺物
1	1	備前町768-2	平成18年3月17日	試	個人住宅	—○ 水戸市教育委員会2007
	1	天王町1727-3ほか12筆	平成18年5月17日	試	宅地造成	—○ 水戸市教育委員会2009a
	2	天王町869-7ほか10筆	平成25年7月30日	試	売買調査	○○
	3	天王町868-1他	平成28年7月13日	試	宅地造成	○○
	4	天王町869-8他	平成28年7月15日	試	個人住宅	—○
	5	天王町866-1～3, 869-1～8	平成28年8月9日	試, 本	宅地分譲・個人住宅	○○ 縄文時代後期土坑1基, 平安時代 竪穴式住跡4軒
2	6	天王町866-3, 869-5～7	平成29年7月10日～平成29年5月4日	本	宅地分譲・個人住宅	○○ 水戸市教育委員会2009a
	7	天王町864-5	平成18年10月11日	試	個人住宅	—○
	8	備前町754-4～11～12	平成21年3月13日	試	個人住宅	○○ 氷戸鉢形器出土。水戸市教育委員会2011
	9	備前町752-8	平成22年6月4日	試	個人住宅	—○
	10	天王町862-1	平成24年5月11日	試	—	—
	11	備前町845-6	平成25年3月5日	試	個人住宅	—
3	12	天王町853-4 地内	平成25年3月5日	試	個人住宅	○○
	13	備前町808-5	平成25年4月5日	試	個人住宅	—
	14	備前町756-5, 757-7	平成26年5月15日	試	共同住宅	—
	15	備前町777-2, 777-3	平成26年10月28日	試	個人住宅	—○
	16	備前町755-11	平成27年9月30日	試	個人住宅	○○
	17	備前町755-11	平成28年4月12日～平成28年4月28日	本	個人住宅	○○ 縄文時代後期加曾利B式竪穴建物跡1軒
18	1	備前町750-3～4～5	平成28年12月21日	試	個人住宅	—
	1	備前町754-3の一部	平成28年12月21日	試	建設住宅	○○
	1	備前町754-3の一部	平成28年12月21日	試	建設住宅	○○
19	1	天王町872	平成29年4月18日	試	共同住宅	○○
	2	天王町872	平成29年5月25日～平成29年6月20日	本	共同住宅	○○ 古墳時代前期竪穴建物跡1軒, 平安時代土坑1基, 近世の遺構多数
17	1	備前町750-2	平成29年4月18日	試	共同住宅	○○
	2	備前町750-2	平成29年6月24日～平成29年6月31日	本	共同住宅	○○ 縄文時代中期阿玉台B式竪穴建物跡1軒
18	1	備前町856-1	平成29年6月13日	試	個人住宅	○○ 縄文時代後期加曾利B式竪穴建物跡1軒
19	1	備前町755-8	平成29年10月11日	試	個人住宅	—

第3章 検出された遺構と遺物

今次調査区は前記の如く、水戸城の西側に展開する武家屋敷地であり、現在もその後裔が居住する。試掘調査の結果も近世以降の遺跡と想定されていたが、調査の進捗に伴い古墳時代の竪穴建物跡や平安時代の土坑が確認され、該期の土師器が出土した。近世の遺構としては、据立柱式建物跡や土坑、性格不明遺構、時期不詳の井戸跡や近代の遺構などが確認され、多數の陶磁器・土器類が出土した。

第1節 古墳～平安時代

1. 概要

該期の遺構は古墳時代前期の竪穴建物跡1軒、平安時代の土坑1基である。遺物は古墳時代の土師器8片、平安時代の土師器6片である。

2. 竪穴建物跡

SI-1 (第6図、図版ID～J・5、第3表)

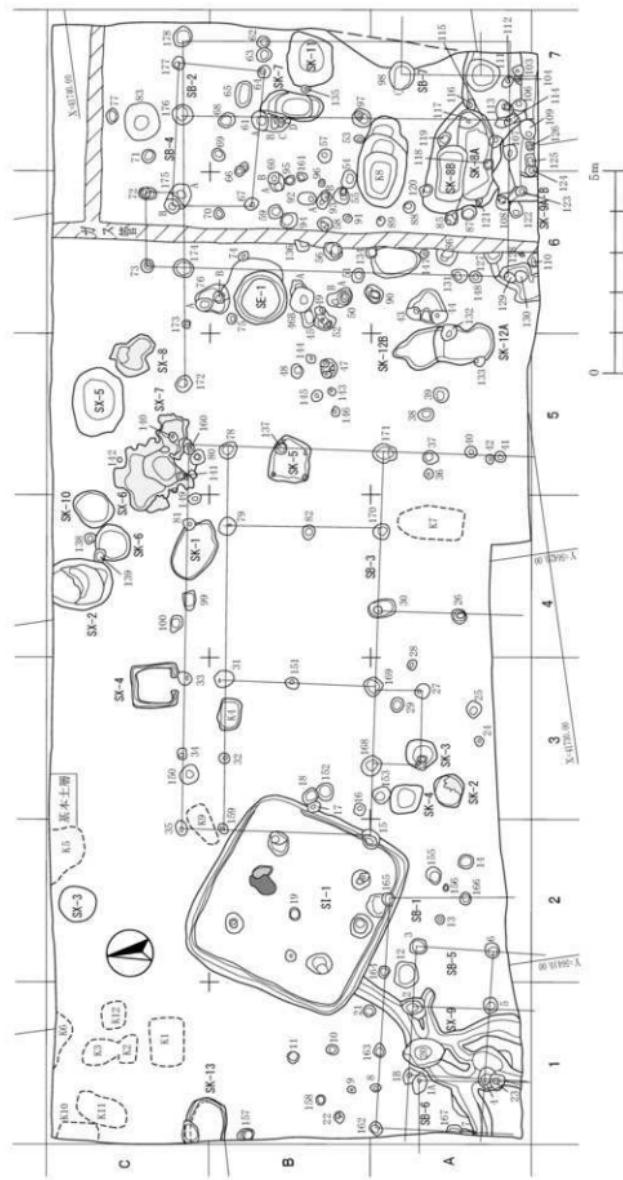
調査区の西寄りに確認した。平面形は南北長約4.5m、東西長約4.6mの隅丸方形で、炉跡を通る主軸方位はN-34°-Eを示す。壁は現存高40～45cmで、概ね直立する。壁下には幅14～18cm、深さ6～8cmの壁構が設けられており、北東隅を除きほぼ全体に認められた。床面は粗掘りの後、ローム主体の土で埋め戻したもので平坦に硬く縮まっていた。炉跡は、竪穴の中央やや北寄りの主柱穴P-1とP-4の中間に位置する。長さ84cm、幅56cm程の楕円形の地床炉で、北東側に長さ約50cm、幅15～25cm、厚さ8cm程の軟質の凝灰質泥岩が遺存した。表面は被熱によって変色しており、枕石として利用されたものと推察される。小穴は、7基確認し、P-1～4が主柱穴、P-5は出入口施設、P-6は所謂貯蔵穴と思われる。主柱穴は径40×50cm程の楕円で、各隅側が深さ45～50cmと深く掘り込まれていた。埋積土は9層に分けられ、自然埋没の後、多量のローム土が投棄された人為的埋没と判断される。なお、北東隅の床面近くに、径10～20cmの焼土塊が認められたが、火災を想定し得るものでは無い。

遺物はすべて土師器で、壺(1・2)・小型甕(3)・壺(4～6)の他未掲載の壺2片を含め計8片の出土である。これらの遺物より、本跡は4世紀代の所産と考えられる。

3. 土坑

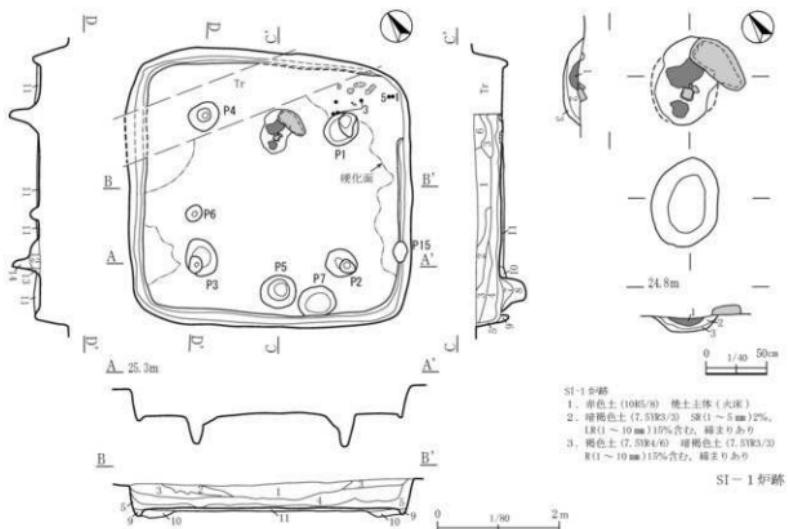
SK-1 (第7図、図版IK・L・5、第3表)

4B・C区に所在する。北東部がP-81に切られる。平面形は長径165cm、短径98cmの楕円形で、長軸方位はN-54°-Wを示す。壁は現存高5cm程でやや外傾する。底面は中央に向かって緩やかに凹み、中央での深さは10cmとなる。また、底面の中央に焼土(弱い焼面)が認められ、北東の壁際に少量の炭化物(材)が認められたことから、土坑内における火の使用が推察される。土器焼成土坑や火葬跡とは考え難く、屋外での炊事や火を使用した祭祀等の可能性が推測される。埋積土は単層で、焼土粒・炭化物粒を含む。



第5図 遺構配置図 (1:120)

遺物はすべて土師器で、鉢（1）・三足鍋の脚（2）・甕（3・4）の他未掲載の甕2片を含め計6片の出土である。これらの遺物より、10世紀後半代の所産と推定される。

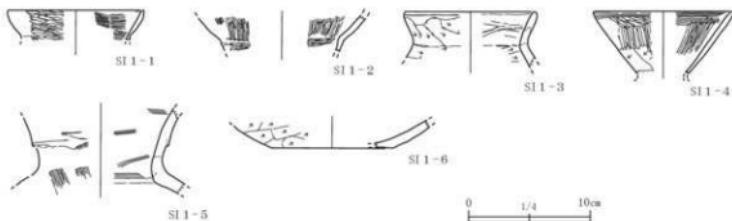


SI-1

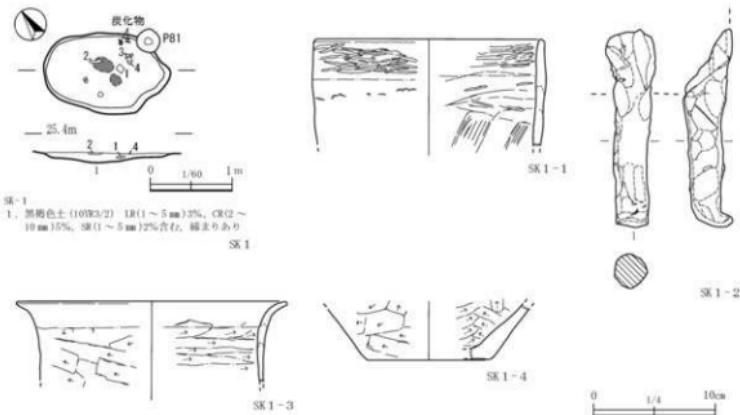
1. 黄褐色土 (10YR5/3) ソフトローム土体, LR(1) ~ 10 mm 15%含む, 線まりあり
2. 黄褐色土 (10YR5/3) ハードローム土体, 黒褐色土 (10YR3/2) (LR-B1 ~ 20 mm) 15%, 黄褐色土 (10YR5/3) B(1) ~ 20 mm 15%含む, 線まりあり
3. 黑褐色土 (10YR3/2) LR(1) ~ 3 mm 10%含む, 線まりあり
4. 塗褐色土 (10YR3/3) LR(1) ~ 10 mm 20%含む, 線まりあり
5. 灰黄褐色土 (10YR4/3) LR(1) ~ 3 mm 20%含む, 線まりあり
6. 黑褐色土 (10YR3/1) LR(1) ~ 3 mm 15%含む, 線まりあり
7. 黑褐色土 (10YR3/1) LR-B(1) ~ 20 mm 20%含む, 線まりあり
8. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) LR-B(1) ~ 30 mm 15%含む, 線まり弱い

9. 塗褐色土 (10YR3/4) LR(1) ~ 10 mm 20%含む, 線まりあり
10. 黄褐色土 (10YR4/3) LR-B(1) ~ 30 mm 12%含む, 黑褐色土 (10YR3/2) B(1) ~ 25 mm 20%含む, 線まりあり, 頸部整地土
11. 黄褐色土 (10YR5/5) 黑褐色土 (10YR3/2) B(1) ~ 10 mm 10%含む, にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 10%含む, 線まり弱い
12. 黑褐色土 (10YR3/1) LR(1) ~ 10 mm 15%含む, 線まりあり
13. 明黄褐色土 (10YR6/9) LR-B(1) ~ 25 mm 40%含む, 線まりあり
14. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) LR-B(1) ~ 20 mm 25%含む, 線まり弱い

SI-1



第6図 SI-1・炉跡・出土遺物



第7図 SK-1・出土遺物

第3表 古墳～平安時代出土遺物観察表

番号	種別	器種	大きさ(cm)			断土	色調	焼成	型番・手法等	() 推定年 [] 現存年	
			口径	底高	底径						
SK1-1	土師器	壺 (口切)	(12.4)	(2.5)	—	白色砂粒、鉄分含む	内外明赤褐色 (2.5W5/6)	普通	外曲ミガキ、内面ハケ目焼きナダ	Na5-2	[内面器面の焼 れ差し]
SK1-2	土師器	壺 (口切)	—	(3.0)	—	白色砂粒、鉄分含む	内外明赤褐色 (2.5W5/6)	普通	口切部外曲ミガキ目焼きミガキ、内面ミガキ	Na5-3	[区区埋土中 内面器面焼 れ差し]
SK1-3	土師器	小型壺 (口切)	[10.6]	[4.6]	—	白色砂粒	外:にぶい赤褐色 (2.5W4/4)	普通	輪縁み、口切部外曲斜め、内面側にヘラナ ダ、体部内外曲横ミガキ	Na2+Na4	
SK1-4	土師器	壺 (口切)	(6.2)	(3.1)	—	石斑、長石、白 色砂粒	内底:にぶい褐色 (7.5W5/4)	普通	輪縁み、口切部内面曲横ナダ仕上げミガ キ、外底下位ヘラ削	Na5-1	[内面器面焼 れ差し]
SK1-5	土師器	壺 (口切)	—	(3.1)	—	白色砂粒、鉄 分含む	内底:褐色(7.5 W6/6)	普通	輪縁み、口切部内面曲横ナダ仕上げ、口切部 外曲斜め差し、一部ハケ目ごこち、口切部ミ ガキ	Na5-1	[内面器面焼 れ差し]
SK1-6	土師器	壺 (体・底)	—	(2.3)	(10.0)	長石、粗砂粒、 褐色鉄	内:にぶい褐色 (7.5W7/4)、外: 黒色(10W2/1)	普通	輪縁み、体・底部外曲ヘラ削り、内面不詳	Na5-1	[区区埋土中 内面器面の焼 れ差し]
SK1-7	土師器	瓶 (口・底)	(18.4)	(8.8)	—	白色砂粒、 褐色鉄	内底:褐色(7.5 W7/6)	普通	輪縁み、口切部内面曲横ナダ仕上げミガ キ、体部外曲斜めナダ、内面粗砂粒ナダ	Na4	
SK1-8	土師器	三足鍋 (脚)	—	(16.2)	脚径 2.4-3.5	白色砂粒、 粗砂粒	内底:褐色(5W 6/6)	良好	手づくね、本体との接合部で剥離	Na7	
SK1-9	土師器	甕 (口・底)	(19.0)	(6.8)	—	細砂粒、褐色鉄	内底:褐色(5W 6/6)	良好	輪縁み、口切部内面曲横ナダ仕上げ、体部外 曲斜めヘラナダ、内面粗砂粒ナダ	Na1+Na2	
SK1-10	土師器	甕 (口・底)	—	(3.9)	(11.8)	長石、褐色鉄	内底:褐色(5W 6/6)	良好	輪縁み、内面横の指ナダ、体部外曲横、斜め ヘラナダ	Na3	

第2節 近世以降

1. 概要

該期の遺構は、掘立柱建物跡7棟、小穴類総数190基（うち63基は建物跡）、土坑類15基、性格不明遺構8基、近・現代の遺構（擾乱＝K）13基などである。遺物は、近世が陶磁器、土器、石製品、金属製品など計271点、近代は陶磁器、石製品など36点、不明8点の総数315点である。

2. 挖立柱建物跡・小穴類

今次調査区内より、計190基の柱穴状の小穴を確認したが（第5表）、建物跡と推定し得たものは7棟（小穴数63基）で、さらに多くの建物跡や組み合わせの存在が推察される。しかし、今回想定した建物跡の中にもSB-2・3など検討の余地をのこすものもある。

SB-1（第8図、図版2A・B、第5表）

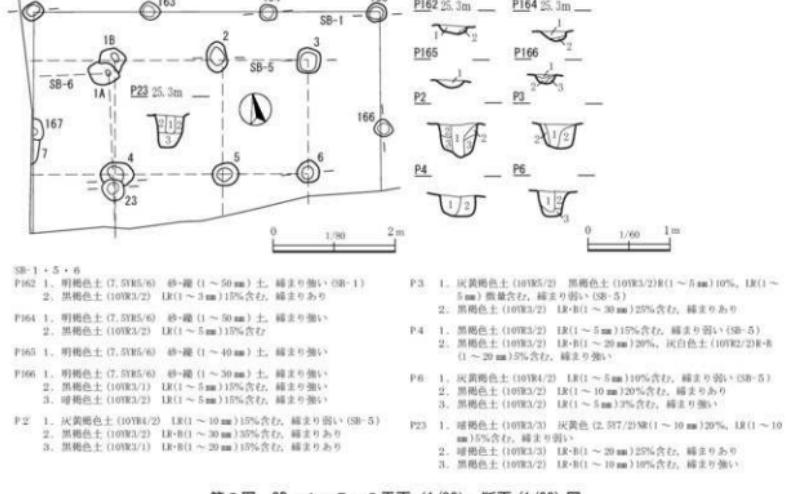
1・2A区に所在する。東西3間（約5.66m）、南北1間（1.95m）以上で、南は調査区外に延び全容は不明。東西軸の棟方位はN-79°-Wを示す。本跡の特徴は、柱掘方が8~10cmと浅く、埋積土として径1~50mmの小砂利が充填されていたことがある。掘立柱式では無く、ある種の基礎普請の一つかとも思われる。遺物の出土は無かった。

SB-5（第8図、図版2A・C、第5表）

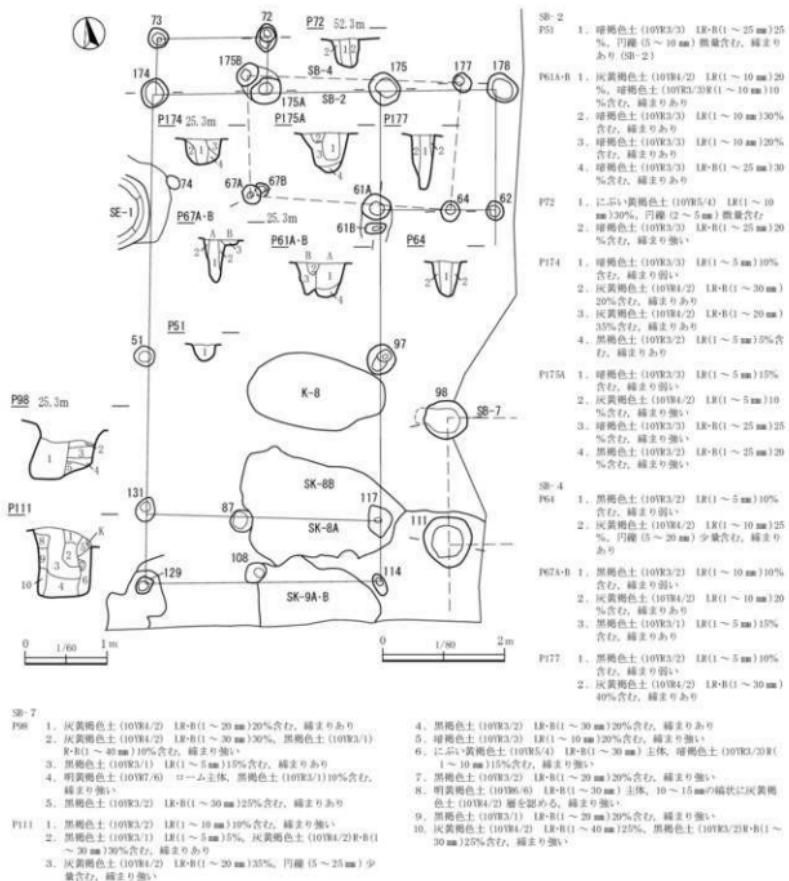
1・2A区に所在する。SB-6に切られ、SX-9を切る。東西2間（3.3m）、南北1間（1.8m）以上で、南と西は調査区外に延び全容は不明。東西軸の棟方位はN-70°-Wを示す。柱掘方の深さは30~40cmで、掘立柱式である。遺物の出土は無かった。

SB-6（第8図、図版2A、第5表）

IA区に所在する。SX-9、SB-5を切る。南北1間（1.9m）を確認したのみで、南と西は調査区外に延び全容は不明。南北軸の棟方位はN-8°-Eを示す。柱掘方の深さは40cm程度、掘立柱式である。遺物の出土は無かった。



第8図 SB-1・5・6平面(1/80)・断面(1/60)図



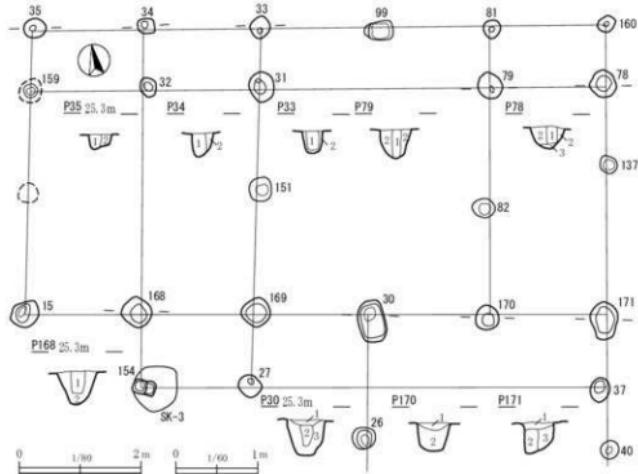
第9図 SB-2・4・7平面(1/80)・断面(1/60)図

SB-4 (第9・13図、図版2D・5、第4・5・8表)

6B・C、7B・C区に所在する。SB-2と重複するが、先後関係は不明。東西1間(3.3~3.5cm)、南北1間(1.9~2.1m)の不整長方形。桁行方位はN-79°-Wを示す。本跡の特徴は柱掘方が50~60cmと他に比べ深く、桁行の柱間が著しく広い(2間分相当)ことにある。北東隅のP-176と、南西隅のP-67より同一箇所と見られる肥前産の白磁碗の破片が出土し、北西隅のP-175Bからカワラケ片が出土しており、意図的な埋納が推察される。いずれも18世紀代の所産と考えられる。

SB-7 (第9図、図版2D、第5表)

7A区に所在する。南北1間(1.9m)を確認したに過ぎず、東と南は調査区外となり全容は不明。南北軸の棟方位はN-8°-Eを示す。2基の柱掘方は径約0.7m、深さ0.7~0.8mで、他とは明確に異なる。位置的に門的な施設と思われるが現状では判然としない。南側のP-111は、土層から同位置での建て替えが認められ、P-98もその可能性が高い。同家では、空襲で焼失する前は長屋門があったと伝えられるが、土層などに空襲の形跡は確認されなかった。遺物の出土は無かった。



SB-3
P30 1. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~40mm)20%含む、縫まりあり
2. 深灰褐色土(10YR4/2) LR(1~5mm)10%含む、縫まり強い
3. 黒褐色土(10YR3/2) LR(1~30mm)20%含む、縫まりあり

P33 1. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~5mm)10%含む、縫まり弱い
2. 黒褐色土(10YR3/2) LR(0~25mm)20%含む、円錐(5~20mm)散在含む、縫まりあり

P34 1. 深褐色土(10YR3/2) LR(1~5mm)15%含む、縫まりあり
2. 深灰褐色土(10YR4/2) LR(1~10mm)5%含む、縫まり強い

P35 1. 黑褐色土(10YR3/2) LR(1~10mm)15%含む、縫まりあり
2. 黑褐色土(10YR3/2) LR(1~40mm)30%含む、縫まり強い

P79 1. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~10mm)20%含む、縫まり弱い
2. 黑褐色土(10YR3/2) LR(1~5mm)15%含む、縫まり弱い
3. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~10mm)20%含む、縫まりあり

P79 1. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~10mm)10%含む、縫まり弱い
2. 黑褐色土(10YR3/2) LR(1~10mm)20%含む、縫まりあり

P168 1. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~5mm)10%含む、縫まり弱い
2. 黑褐色土(10YR3/2) LR(1~25mm)20%含む、縫まり強い

P170 1. 深い黄褐色土(10YR5/2) LR(1~10mm)40%含む、縫まりあり
2. 黑褐色土(10YR3/2) LR(1~10mm)15%含む、縫まりあり

P171 1. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~10mm)20%含む、縫まり弱い
2. 黑褐色土(10YR3/2) LR(1~5mm)15%含む、縫まり弱い
3. 深黄褐色土(10YR4/2) LR(1~10mm)20%含む、縫まりあり

第10図 SB-3平面(1/80)・断面(1/60)図

SB - 3 (第10図、図版2G、第5表)

2~5A~C区に跨って所在する。東西5間(9.4m)、南北2間(3.8m)の母屋と北辺が幅0.9m(約3尺)、南辺に幅1.2mの縁を想定したが、南辺は通しではなく部分的な張り出しの可能性もある。東西の桁行方位はN-79°-Wを示す。柱掘方の深さは20~40cmで、掘立柱式である。なお、母屋南辺の東側の2間分、P-30・170・171は南側へ建物の張り出しが推測されるとともに、掘方最上層の埋積土が非常に硬く締まっており、掘立柱から別の基礎に工法が変わった可能性をもつ。遺物の出土は無かった。

その他の小穴(第5図、第5表)

前述の如く総数190基のうち130基程は建物として想定出来なかつたが、その大部分は規模・形状・埋積土などから、柱穴跡と考えられる。この中で、P-83Bとしたものは、径約90の円形で深さ約25cm、壁は外傾し、底面が径35cm程の円形・土層から北半部に小穴P-83Aの重複が推定される。南側のP-83Bより土師十能の破片が出土し、SK-2出土のものと接合した。

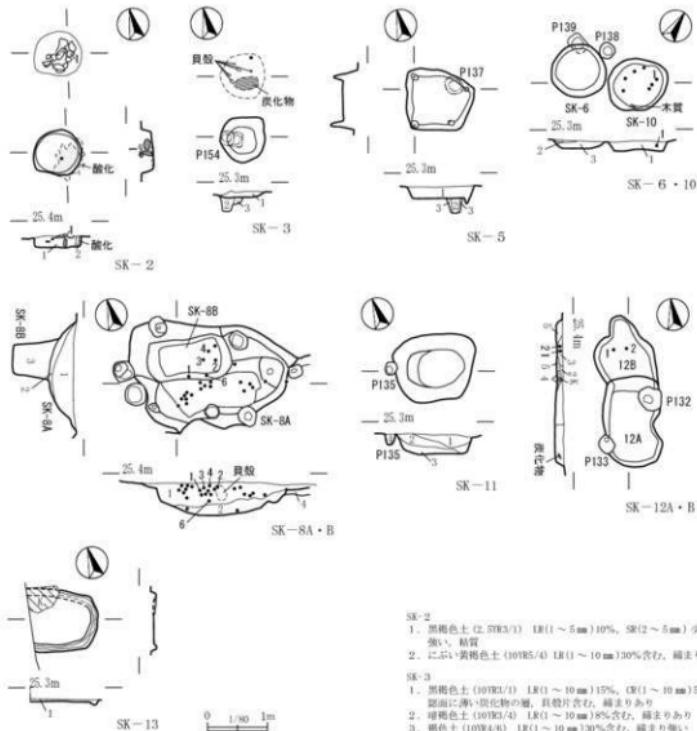
3. 土坑類(第11・13・14図、図版2H~3R・5、第4・6・8表)

この時期の土坑は計15基確認したが、規模・平面・断面形状等も様々であり、その用途も一様ではないと思われる。平面が円形のSK-2・6・10などは、埋積土や遺存状態から流し場の水溜もしくは尿溜等の可能性が推察された。SK-2は鉄分の酸化に伴う沈着が認められることから流し場の水溜、SK-10は桶の一部と見られる本質が僅かに遺存し、出土銭貨の付着物から尿溜の可能性が推察される。SK-3・4は浅い掘り込み内に、貝殻片や炭化物片、極少量の土器・磁器が混入しており、生活ゴミのゴミ穴、SK-8A・9Aは浅めの大型の掘り込み内に多数の土器・陶磁器類がまとまって混入しており、建物の改修等に際してのゴミ投棄穴、これらの下に掘られたSK-8B・9Bは形状から意図的に掘られたものと判断されるが用途は不明である。SK-5は不整方形の四隅に細い木杭を打ち込んで壁面に板材を固定したものと推察され、ゴミ穴もしくは何らかの貯蔵施設と思われる。SK-11・12A・12B・13は用途は推測し難いものの、SK-13は壁下に壁溝状の深い溝が設けられていた。

4. 性格不明遺構・その他の遺構(第12・13・14図、図版4A~Q・5、第4・7・8表)

性格不明遺構(SX)は8基、その他の遺構として近・現代の遺構(K)13基、井戸跡(SE)1基を確認した。なお、現代のゴミ穴9基は調査の対象より除外した(第7表)。

これらも様々な形状を示し、用途的にも想定し難い一群である。SX-2としたものは、長さ1.5m強(一部地区外に延びる)の楕円形の掘り込み内より、ブロック状の凝灰質泥岩がまとまって出土した。石材は所謂「神崎岩」と呼ばれるもので、調査地の南方150m程の崖下に岩切場の一部が現存している。加工時の幅35mm程の工具痕が明瞭にのこり、一部被熱によって変色したものも見られた。掘り込みの底面の状況などから、ここで使用したものでは無く、樹木の抜き取り痕等の凹地に投棄されたものと思われる。ここからは、土器・陶器・磁器などが出土し、17世紀前半代のものが目立つ。SX-3は径90cm程の円形で、



SK-5

1. 黒褐色土 (2.5Y3/1) LR-B(1~10mm)15%含む。縫まりあり。やや粘質
2. 混合黄色土 (2.5Y4/2) LR(1~10mm)10%含む。縫まりあり (P137)
3. 混合色土 (10Y3/4) LR(1~10mm)15%含む。縫まり強い (P137)

SK-6 · 10

1. 黒褐色土 (2.5Y3/1) LR(1~10mm)5%, 円窪 (5~30mm)15%含む。縫まりあり (SK-6)
2. 黒褐色土 (2.5Y3/2) 混合黄色土 (2.5Y5/2) LR(1~20mm)20%, 円窪 (5~30mm)5%含む。縫まりあり。やや粘質 (SK-6)
3. 黒褐色土 (2.5Y3/1) 混合色土 (2.5Y5/2) LR-B(1~30mm)25%, 円窪 (3~30mm)5%, 遺物含む。縫まりあり。やや粘質 (SK-10)

SK-8A · B

1. 混合黄色土 (10Y4/2) LR(1~10mm)10%, CR-B(1~30mm)5%。円窪 (5~90mm) 少量。シジミの貝殻中央部にまとまって遺存。その周囲にCR-Bが多い。遺物多く含む。縫まりあり (SK-8A)
2. 混合黄色土 (10Y4/2) LR-B(1~40mm)30%, 円窪 (5~40mm) 少量含む。縫まりあり (SK-8A)
3. にじみ質黄色土 (10Y5/4) LR-B(1~40mm)30%。黒褐色土 (10Y3/2) 30%含む (SK-8B)
4. 黒褐色土 (10Y3/2) LR(1~10mm)15%含む。縫まりあり

SK-2

1. 黒褐色土 (10Y3/1) LR(1~10mm)10%, SK(2~5mm) 少量含む。縫まり強い。粘質
2. にじみ質黄色土 (10Y5/4) LR(1~10mm)30%含む。縫まりあり

SK-3

1. 黒褐色土 (10Y3/1) LR(1~10mm)15%, CR(1~10mm)5%含む。南側面 背面に薄い鉄化物の層、鉄片含む。縫まりあり
2. 黑褐色土 (10Y3/4) LR(1~10mm)5%含む。縫まりあり
3. 黑褐色土 (10Y3/6) LR-B(1~10mm)30%含む。円窪 (5~30mm) 残量含む。縫まりあり

SK-11

1. 从鉄褐色土 (10Y3/2) 黑褐色土 (10Y3/2) LR(1~10mm)10%, LR(1~5mm)10%。円窪 (5~30mm) 少量含む。縫まりあり
2. 混合黄色土 (10Y4/2) にじみ質黄色土 (10Y5/2) LR-B(3~30mm)30%。円窪 (5~20mm) 少量含む。縫まりあり
3. 黑褐色土 (10Y3/2) LR-B(1~80mm)20%, 円窪 (5~30mm) 残量含む。縫まりあり
4. 黑褐色土 (10Y3/2) LR-B(1~40mm)20%含む。縫まりあり (P135)

SK-12A · B

1. 黑褐色土 (10Y3/2) LR-B(1~30mm)20%, 貝殻片、円窪 (1~10mm) 少量含む。CR(1~5mm) 残量含む。南端部に CR (100×30mm) 遺存。縫まりあり。やや粘性 (SK-12A)
2. 混合黄色土 (10Y5/2) LR(1~10mm)25%含む。縫まりあり
3. 黑褐色土 (10Y3/3) LR(1~10mm)10%含む。縫まりあり (SK-12B)
4. 混合黄色土 (10Y4/2) LR(1~10mm)35%含む。縫まりあり (SK-12B)
5. 混合黄色土 (10Y5/8) にじみ質黄色土 (10Y5/4) 25%含む。縫まりあり (SK-12B)

SK-13

1. 黑褐色土 (10Y3/4) LR(1~10mm)15%。黒褐色土 (10Y3/2) LR(1~10mm)10%含む。縫まりあり

第11図 SK-2 · 3 · 5 · 6 · 8A · B · 10 · 13

確認面が遺構の底面と見られる。底面には、紙状となった木質片や粘土質の染み状の痕跡などが認められ、SK-10と同様に桶状のものを埋没した痕跡と推定される。SK-4は一辺1m程の方形で、南側の中央部を除き溝が廻る。これも溝部に板状のものを固定し、南側が開口していたと推察される。SK-5・13と同様の性格が推察される。SK-6～8はかつて同家の風呂場があったとされる付近に所在する。SK-6・7は長期間の水使用に伴う鉄分の酸化による沈着が著しい。SK-8も埋積土の類似性から同様のものと推察される。SK-9は、幅30～50cm、深さ25～50cm程の溝状の掘り込みが不規則に蛇行して認められた。地割れや植物の根等の痕跡で無いものの、人為的行為の所産とも判断し難く、文字通り性格不明遺構である。

SK-8は近代の掘り込みの1つである。埋積土の大部分は、焼土・灰等で多数の近・現代遺物を含んでいた。前述の空襲によって焼失した家財を埋め込んだものと推察された。なお、底面近くには若干の黒褐色土の堆積が見られたものの、大部分は開口していたと見られ、東側に階段状の施設を設けて出入の便を考慮している。あるいは、戦時等における貴重品の避難場所等の施設であろうか。

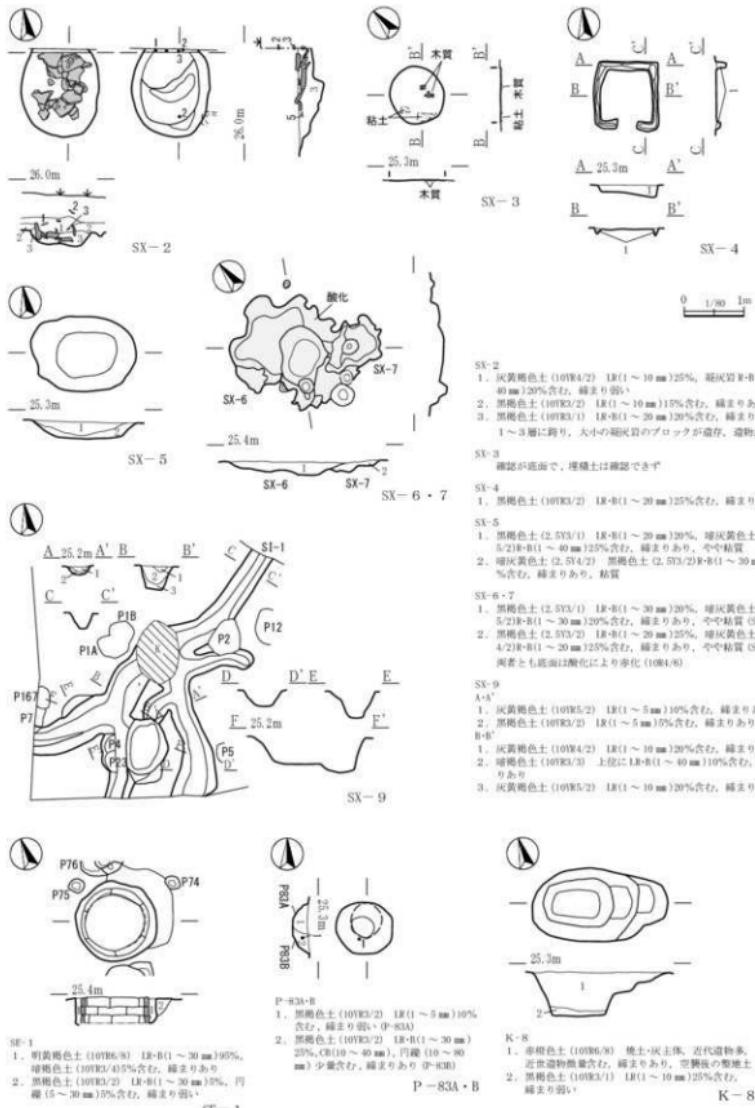
SE-1は井戸跡で、今回の開発に先立って埋め戻されたらしいが、遺構確認作業中に確認されたもので、表土層中の分は失われている。内径は南北約0.94m、東西約0.97mの円形、井戸側に神崎岩が使用されていた。一段15cm程で、6箇で1周するように組まれていた。長さ60cm、幅・厚さとも15cm程の柱状の石材を、内側の中央と外側の両端を削つて弧状に整形され、幅35mm程の工具痕が認められた。石材の外側には6～8cm程の厚さでローム土が裏込め材として使用されていたが、確認面より約45cm下で消失する。これより下は、井戸の壁面に接して石材が積まれるものと思われる。

5. 出土遺物（第13・14図、図版5、第4・8表）

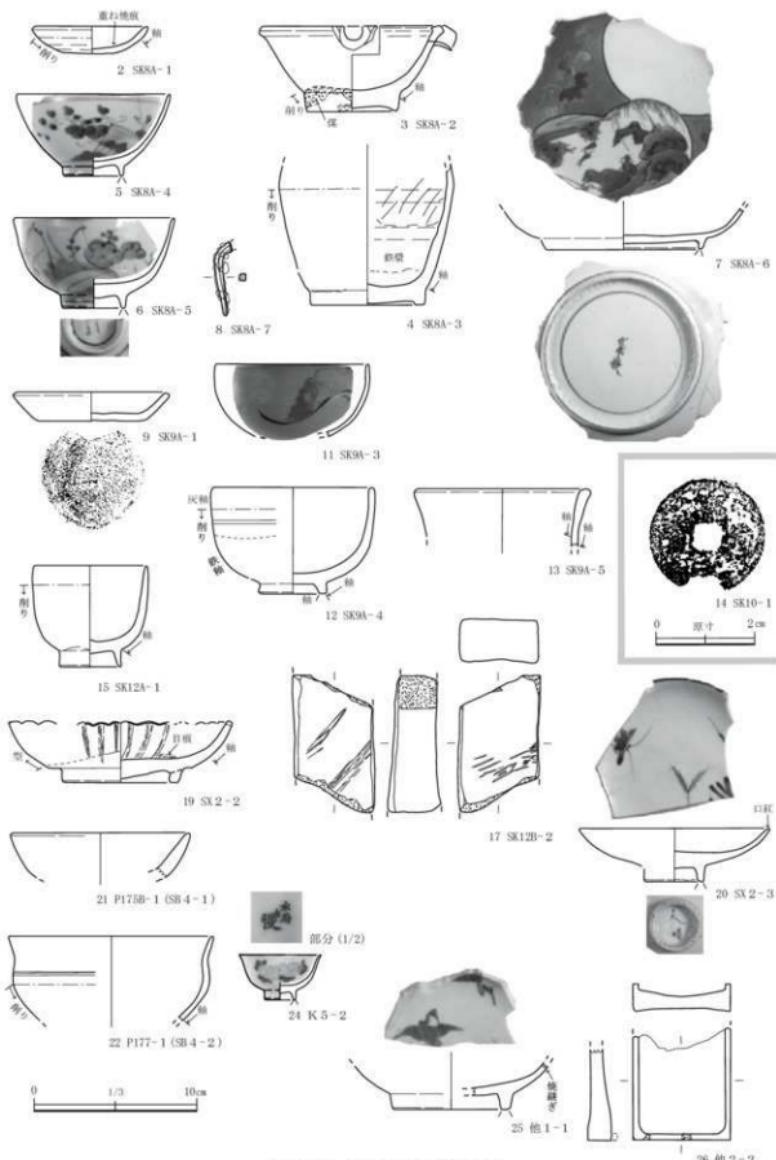
この時期の遺物は今次調査における出土遺物の95%を占める。なお、出土品は現代にまで及ぶが、調査の対象は基本的には近世までとし、近代以降の土地利用を考える上で参考となる資料も調査対象とした。

遺物は土器・陶器・磁器が大部分で、それぞれ同等数出土しているが土器類は大型で脆いものもあり、箇体数は後2者に比べ少なかったと思われる。土器類は土師質と瓦質があり、カワラケ（ロクロ成形・精製・粗製）、焰烙、火鉢、風炉、火消壺、同蓋、十能、植木鉢、行火等があり、在地産と見られる。また、焼塙壺や施釉土器も認められた。陶器類の大部分が瀬戸・美濃産で、17世紀代に肥前の唐津・現川産が含まれ、18～19世紀には京・信楽産の他相馬・笠間・益子産や地元の松岡焼、七面焼と思われるものも認められた。なお、南西約500mに七面焼、西約1.5kmに開窯焼の窯場があり、在地系の製品は今後再考を要するかもしれない。各種碗類の他壺、皿、鉢、土瓶、土鍋、片口鉢、徳利、御神酒徳利、甕、小皿（灯明皿）、植木鉢などがある。

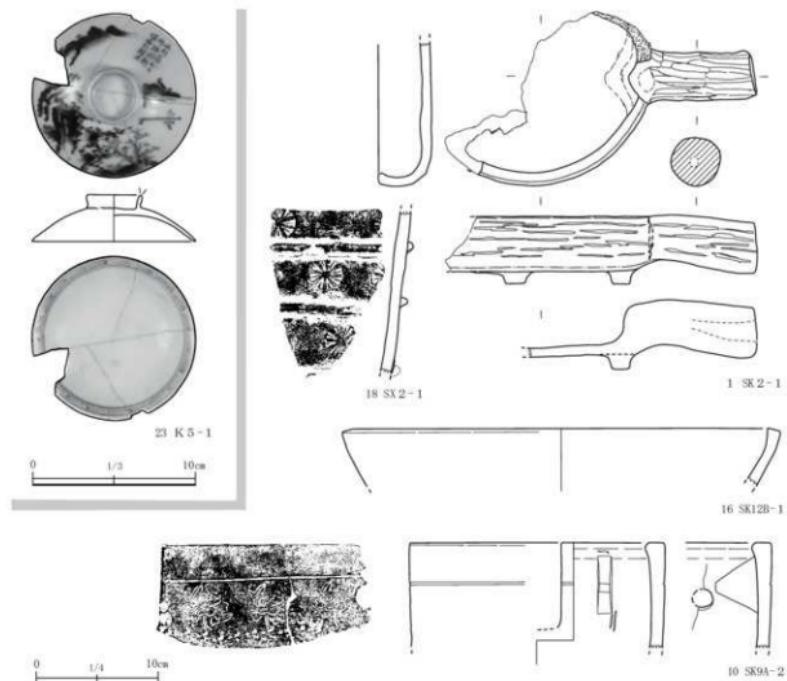
磁器類は17～18世紀代は肥前産（波佐見含む）で占められ、砂目高台の皿なども認められた。染付類が主体で、青磁染付、白磁の食器類の他青磁の香炉なども見られた。また、磁器類については漆緞ぎ、焼緞ぎを施したもののが複数認められる。さらに、瀬戸・美濃産陶器と肥前産磁器の徳利を鉄漿入れに転用したものが見られた。石製品は硯、砥石の他用



第12図 SX-2~7・9, SE-1, P-83A・B, K-8



第13図 近世以降出土遺物（1）



第14図 近世以降出土遺物（2）

途不明の神崎岩ブロック、時期不詳の井戸側石材などがある。調査地の南約150mの崖下に「神崎岩」の採掘場があり入手が容易であったと推察される。

金属製品は、寛永通寶（古寛永）と和釘が各1点である。

近代の遺物として磁器の壺の見込みに「水府自慢」と転写されたものがある。市内元吉田町の明利酒類株式会社の前身加藤高蔵商店が配布したものである。これとともに「水戸吉田 加藤酒造店」と右から左に記された陶器蓋物の蓋が出土しており、大岩家とは親戚関係にあるとのことである。同社は昭和25（1950）年に社名変更しており、それ以前の製品と考えられる。また、磁器製の洋服掛けや電気機具の部品と考えられる戦時の代用品や石板（スレート）・石筆（蠟石）なども出土した。

（水野）

第4表 近世以降出土遺物観察表

番号	種別	器種	大きさ(cm)			土色	色調	焼成	形態・手法等		出土位置	備考
			口径	高さ	底径							
1 SK2-1	土器	手掘	長さ [25.6]	幅 5.5	底径 [18.0]	褐色	内:灰褐色(2.5/6/2) 外:灰褐色(10YR 7/1)	良好	口コロ、執輪、墨書きあり	内:ナラ丸ミガキ、外:ナラ、ヘラ削り抜 きガリ、3足、把手付	S-1+19C S-2+19C	在地底:18~ 19C
2 SK2-2	陶器	手掘	小葉 灯籠型	7.1	1.7	2.9	精良	白	口コロ、执輪、墨書きあり	口コロ、19C	瀬戸・美濃:19 C	
SK2-3	陶器	片口鉢 小	11.2	5.3	5.6	精良	白に少し黄褐色(10YR 7/2)	良好	口コロ、执輪、墨書きあり	口コロ、19C	瀬戸・美濃:19 C	
SK2-4	陶器	利形	—	[8.9]	7.0	精良	白に淡黄褐色(10 YR 8/4)	良好	口コロ、执輪、墨書きあり	口コロ、19C	瀬戸・美濃:19 C	
SK2-5	磁器	瓶	—	[9.4]	5.1	[3.6]	精良	白	良好	口コロ、内:口切削線、見込み墨書き内に文字。 外:上:削線、底に墨書き。	S-2	肥前:19C
SK2-6	磁器	丸皿	—	[9.8]	5.6	[3.8]	精良	白	良好	口コロ、各・桜・梅花・忍冬文、高台内面あり、ク ルシ繩ぎ	手織土中	肥前・佐賀:19 C
SK2-7	磁器	瓶	—	[2.5]	9.6	—	精良	白	良好	口コロ、内:山本山文に花葉草の墨書き、高 台内面に「化年製」記、折瓶1ヶ。クルシ繩 ぎ	S-2	肥前:17C 全体に嵌入
8 紡製品	糸	—	長さ [4.69]	幅 ~0.38	—	[3.4]g	重	—	—	糸網	手織土中	細部欠損
SK2-8	土器	カワラク 土師質	9.3	1.8	6.6	精良	褐色	内:褐色(7.5 YR 8/4) 外:青	普通	口コロ、底部を切り	S-2+9B	在地底:19C 半4
SK2-9	土器	カワラク 土師質	—	—	—	—	—	—	—	—	手織土中	在地底:18~ 19C
10 SK2-10	土器	風炉	[20.6]	8.6	—	—	細砂粒	内:灰褐色(10 YR 8/4)、外:黑色 (10YR 2/1)	良好	陶輪み、内:縦ナラ、二角突起、外:ミダリ、 印花草、上位に切り込み、円孔を穿つ	手織土中	手織土中
11 SK2-11	陶器	手作平継 色絵平継	—	[9.4]	[4.5]	—	精良	白	良好	口コロ、灰褐色、色絵:松葉(樹)文、緋紗・ル リ繩ぎ	手織土中	京・京楽系:18 C
12 SK2-12	陶器	手作	—	[9.8]	6.6	4.0	精良	白	良好	口コロ、内:灰褐色、外:絞輪、灰褐色の墨書き分け	手織土中	瀬戸・美濃:18 C~19C前半
13 SK2-13	磁器	香炉	10.4	[3.6]	—	精良	白	良好	口コロ、内:体部墨書き	手織土中	肥前:18C	
14 SK2-14	紡製品	糸貯	径 2.41	方孔 0.31	—	[2.0]g	重	—	—	糸通寶(古糸通)	手織土中	手戸:17C後 半
15 SK2-15	陶器	手作	—	7.0	6.3	3.8	手編乳頭、精良	白	良好	口コロ、青磁輪を折判割け	手織土中	相馬5在地:19 C
16 SK2-16	土器	罐	[33.8]	[4.7]	—	—	砂粒、長石粒	内:灰褐色(10 YR 8/4)	良好	陶輪み、口部・内面墨書き上げ、外:和ナラ 竹	手織土中	在地底:17C
17 SK2-17	有製品	碗	長さ [8.4]	幅 4.9	厚さ —	[19.2]g	重	—	—	扁平化、中:底石	手織土中	在地:時期不詳
SK2-18	土器	火鉢	—	[13.3]	—	—	褐色色、細砂	内:灰褐色(10 YR 5/1)、外:黒褐色 (10YR 5/1)	良好	陶輪み、内:縦ナラ、その間に印 花草(菊)文	S-2	在地:時期不詳 中世?
19 SK2-19	陶器	瓶	[13.4]	3.8	7.1	精良	白	内:浅黄色(10 YR 8/3)	良好	口コロ、堅型、村高舟、火鉢、見込みに目皿 2ヶ	S-2+No5	瀬戸・美濃:17 C
20 SK2-20	有製品	瓶	[11.8]	3.3	3.6	精良	白	良好	口コロ、内:印花草・口紅、外:粘輪、高台内 に「大明」の款、高台筋目、全体に嵌入	手織土中	肥前:17C前半	
21 SK2-21	土器	カワラク 土師質	[11.0]	[2.8]	—	—	細砂粒、良石 2.5kg骨董 赤褐色	内:褐色(7.5 YR 8/2)	普通	口コロ	手織土中	在地底:18C
22 SK2-22	磁器	瓶	[12.4]	[5.3]	—	精良	白	良好	口コロ、体部外凸に細い2条の波線、同下半 部削り仕上げ、模擬滑溜質様に肌色の火色、様 似800	手織土中	肥前:18C代	
23 SK2-23	磁器	瓶	10.2	2.9	3.3	精良	白	良好	口コロ、内:口沿重文手拂、外:山文・詩文、蟹 脚磨擦にダメージ	手織土中	瀬戸・美濃:19 C前半	
24 SK2-24	磁器	瓶	—	5.1	2.8	1.8	精良	白	良好	気泡通り、外:イチジン・染付文、見込みに 水月白字	手織土中	瀬戸・美濃:19 C前半
25 SK2-25	磁器	瓶	—	[2.9]	[7.2]	精良	白	良好	口コロ、作灰釉、見込みに鷺3羽、桃繩 ぎ	表土中	肥前:18C 5a-Bgr	
26 SK2-26	有製品	碗	長さ [7.0]	幅 6.1	厚さ 1.8	[94]g	重	にふい褐色(7.5 YR 8/4)	—	銀張りあり、跡の跡の目立つ	表土中	在地:時期不詳
SK2-27	有製品	碗	—	—	—	—	—	—	—	—	表土中	5a-Bgr

第5表 小穴一覧表(1)

No.	地区	長径×短径×高さ	平面形	備考	No.	地区	長径×短径×高さ	平面形	備考	〔 〕推定値 []現存値。単位 cm	
P-1A	IA	41×130×30	(楕円)	SB-6, SB-5を切る	P-13	2A	21×21×12	円			
1B	IA	55×37×39	楕円	SB-5	14	2A	37×36×14	円			
2 IA		50×45×40	円	SB-5, SX-9を切る	15	2A+B	50×41×31	円	SB-3, SI-1を切る		
3 2A		42×40×29	円	SB-5	16	3B	33×28×25	円			
4 IA		53×[33]×25	(楕円)	SB-5, SX-9を切る	17	3B	42×31×30	円			
5 IA		43×38×23	(円)	SB-5	18	3B	36×32×46	円	SI-1を切る		
6 2A		39×36×30	円	SB-5	19	2B	30×28×24	円	SI-1を切る		
7 IA		[40]×[15]×16	(?)		20	1A	105×70×42	楕円	壇丸		
8 1A		25×21×30	円		21	1A-B	33×29×21	円			
9 1B		22×20×22	円		22	1B	27×26×26	円			
10 1B		31×26×33	円		23	1A	37×36×40	円	SB-6, SB-5を切る		
11 1B		27×27×15	円		24	3A	23×23×14	円			
12 1+2A		62×55×13	楕円		25	3A	38×36×49	円			

第5表 小穴一覧表（2）

No.	地区	長径×短径×長さ	平面形	備考	（ ）推定値 [] 現存値 単位 cm				
					No.	地区	長径×短径×長さ	平面形	備考
P-26	4A	36×35×60	円	SB-3	P-78	5B	46×42×26	円	SB-3
27	3A	35×35×29	楕円	SB-3	79	4B	45×40×35	円	SB-3
28	3A	26×23×20	円		80	5C	37×36×13	円	SB-3
29	3A	36×33×36	円		81	4C	29×29×35	円	SB-3, SK-1を切る
30	4A	68×43×44	長方	SB-3	82	4B	38×32×20	円	SB-3
31	3B	50×43×20	円	SB-3	83A	7C	50×46×26	円	6.3cmを切る
32	3B	28×26×22	方	SB-3	83B	7C	94×86×28	円	土器, SK-2-1と接合
33	3C	38×33×27	円	SB-3	84				欠番
34	3C	27×24×27	方	SB-3	85	6A	38×33×16	円	
35	2C	31×30×18	円	SB-3	86	6A	[48]×36×58	[内]	
36	5A	24×22×36	円		87	6A	36×36×46	円	
37	5A	40×32×14	楕円	SB-3	88	6A	31×39×30	円	
38	5A	40×33×16	楕円		89	6A	21×21×23	円	
39	5A	38×34×37	円		90	6A-B	47×39×23	楕円	
40	5A	32×29×15	円	SB-3	91	6B	21×21×25	円	
41	5A	28×26×22	円		92	6B	44×32×23	楕円	
42	5A	24×19×47	円		93A	6B	29×[17]×44	[楕円]	
43	6A	33×30×41	方	陶器	93B	6B	29×[31]×36	円	
44	6A	33×29×38	方		94	6B	44×38×7	円	
45	6B	[45]×32×25	楕円	磁器	95	6B	27×23×18	円	
46A	6B	[46]×42×33	[楕円]	磁壺	96	6B	20×16×13	円	
46B	6B	61×58×49	円		97A	7B	44×[23]×26	[内]	SB-2
47A	5B	22×17×23	楕円		97B	7B	50×43×17	[楕円]	
47B	5B	22×16×21	楕円		98	7A	20×62×73	[楕円]	SB-7
47C	5B	22×12×33	楕円		99	4C	37×31×22	方	SB-3
48	5B	32×30×7	円		100	4C	37×26×29	方	
49	6B	25×23×47	円		101				欠番
50A	6B	[28]×33×26	[楕円]		102				欠番
50B	6B	40×36×21	円		103	7A	30×27×56(67)	円	
51	6B	34×34×19	円	SB-2	104	7A	[27]×14×24(27)	楕円	
52A	6B	30×22×24	楕円		105				欠番
52B	6B	12×11×14	円		106	7A	35×29×48	円	
53	7B	27×20×43	楕円		107	7A	37×31×78	楕円	
54	6B	44×35×32	楕円		108	6A	42×32×52	楕円	SB-2
55	6B	42×42×43	円		109	7A	48×37×33	楕円	
56	6B	50×44×52	円		110	6A	35×[24]×37	[楕円]	
57	7B	36×31×27	円		111	7A	82×79×85	円	SB-7
58	6B	37×34×27	円		112	7A	29×24×30(50)	楕円	
59	6B	38×34×17	円		113	7A	44×42×54(70)	円	
60A	6B	39×21×22	円		114	7A	54×[24]×64(70)	楕円	SB-2?
60B	6B	31×28×31	[円]		115	7A	34×39×77	円	
61A	7B	48×40×40	楕円	SB-2, SK-7を切る	116	7A	24×18×49	楕円	
61B	7B	35×17×39	楕円	SB-2, SK-7を切る	117	7A	56×42×54	方	SB-2
61C	7B	29×17×27	楕円	SB-2, SK-7を切る	118	7A	25×22×65	円	
61D	7B	16×14×40	楕円	SB-2, SK-7を切る	119	7A	35×27×37.5	楕円	
62	7B	31×30×14	円	SB-2	120	6A	32×25×24.2	楕円	
63	7B	37×32×17	円		121	6A	18×14×96	楕円	
64	7B	32×31×42	円	SB-4, 磁器	122	6A	38×31×52	楕円	
65	7B	65×40×13	楕円		123	6A	28×25×50	円	
66A	6-7B	25×21×24	円		124	6-7A	32×29×79	円	
66B	6-7B	[20]×20×13	[方]		125	7A	[30]×23×70	長方	
67	6B	33×30×53	円	SB-4, 磁器	126	7A	29×17×66	方	
68	7B	43×37×22	楕円	土器, 磁器	127	6A	45×[28]×37	[内]	
69	7B	33×30×10	円		128	6A	[13]×11×30	[楕円]	搅乱?
70	6B	28×24×12	円		129	6A	32×24×38	楕円	SB-2
71	7C	36×33×20	円		130	6A	28×25×30	円	
72	6C	44×32×33	楕円		131	6A	41×31×35	楕円	SB-2
73	6C	33×31×29	円		132	5-6A	43×36×37	円	
74	6B	27×22×27	[円]		133	5A	26×23×43	方	
75	6B	27×22×14	円		134	6A-B	28×24×25	方	
76A	6B-C	42×32×36	[円]	陶器	135	7B	23×19×18	楕円	
76B	6B	34×33×34	円		136	6B	[32]×38×19	[楕円]	
77	7C	39×31×33	楕円		137	5B	39×27×44.5	円	SK-5に切られる

第5表 小穴一覧表（3）

No.	地区	長径×短径×長さ	平面形	備考	No.	地区	長径×短径×長さ	平面形	〔 〕推定値 [] 現存値 単位 cm	
									〔 〕推定値	[] 現存値
P-138	4C	26×26×32	円		P-159	2B	[20]×[25]×35	円	SB-3	
139	4C	32×24×15	方	SK-6に切られる	160	5C	19×17×17	円	SB-3, SK-7に切られる	
140	5C	30×23×20	椭円		161	7B	26×23×46	円		
141	5C	27×24×28	円		162	1A	30×25×10	円	SB-1	
142	5C	12×12×6	円		163	1A	34×29×11	円	SB-1	
143	5B	23×22×30	円		164	2A	39×26×12	円	SB-1	
144	5B	31×27×30	円		165	2A	34×31×10	円	SB-1, SI-1を切る	
145	5B	31×30×27	円		166	2A	30×28×10	円	SB-1	
146	5B	22×29×27	円		167	1A	35×[17]×10	(円)	SB-1	
147	6A	29×22×37	椭円		168	3A-B	48×45×42	円	SB-3	
148	6A	30×29×28	方		169	3A-B	47×44×37	円	SB-3	
149	4-5C	35×26×20	椭円		170	4A	41×39×33	円	SB-3	
150	3C	48×40×36	椭円		171	5A	61×46×38	椭円	SB-3	
151	3B	40×39×32	円		172	5C	42×37×42	方	SB-2?	
152	3B	44×44×32	円		173	6C	24×24×12	円	SB-2?	
153	3A	44×44×36	円		174	6C	47×43×32	円	SB-2	
154	3A	38×23×32	長方	SB-3, SK-3に切られる	175A	6C	56×[41]×49	(円)	SB-2	
155	2A	45×38×34	円		175B	6C	41×33×50	(円)	SB-4, カワラケ	
156	2A	19×16×16	円		176	7C	51×48×35	円	SB-2	
157	1B	43×[29]×19	(椭円)		177	7C	31×29×67	円	SB-4, 磁器	
158	1B	27×25×13	円		178	7C	50×44×30	円	SB-2	

第6表 近世土坑類一覧表

No.	地区	長径×短径×深さ	平面形	備考	〔 〕現存値 単位 cm	
					〔 〕現存値	単位 cm
SK-2	3A	78×72×15~20	円	壁底面に酸化層、軽灰質泥岩片、土器、志野皿17C、流しの水溜		
SK-3	3A	74×70×9	不整円	P-154を切る、炭化物、貝殻片含む、カワラケ、日常ゴミの穴		
SK-4	3A	78×70×9	隅丸方	貝殻片、炭化物粒含む、磁器半球碗18C、日常ゴミの穴		
SK-5	5B	110×80~100×20	不整方	P-137を切る、西隅に細い木杭の痕跡		
SK-6	4C	90×88×12	円	P-139を切る、上位に円錐含む、カワラケ、陶・磁器、18C、水溜か尿溜		
SK-7	7B	154×[60]×10~20	椭円	P-61A~Bに切られる、底面2段、中央部開む		
SK-8A	7A	280×1.45~1.80×55	不整	SK-8Bを切る、上層にゴミの投棄多、17~19C、一部20Cを含む、ゴミ穴		
SK-8B	7A	140×65~75×82	長方	SK-8Aに上部切られ、遺物無し		
SK-9A	6-7A	[165]×[97]×60~70	不整	SK-9Bを切る、上層にゴミの投棄多、ほとんど18C代、9Bと接合あり、ゴミ穴、P-108-122-123に切られ、P-109-124~126を切る		
SK-9B	6-7A	[65]×[54]×38~55	不明	南は地区外、東側SK-9Aに切られる、遺物少量、18C代		
SK-10	4-5C	98×86×18	椭円	壁に木質片、柵の痕跡、窓、甕通竇、土器・陶・磁器19C代多い、尿溜か水溜		
SK-11	7B	136×112×34	椭円	土器		
SK-12A	5-6A	146×94×15	椭円	SK-12Bを切り、P-132-133に切られる、陶器・土器・施釉土器、19C主体		
SK-12B	5-6A	[120]×98×10	不整	SK-12Aに切られる、砥石、土器、17~18C		
SK-13	1B-C	[120]×102×3	(椭円)	壁に沿って幅15cm深さ5cmの溝廻る		

第7表 性格不明遺構・その他の遺構一覧表

No.	地区	長径×短径×深さ	平面形	備考	[]現存値。単位 cm
SX-1				欠番	
SX-2	4C	[146]×128×20~42	(楕円)	掘り込み内より幅30cm、奥さ30~45cm、厚さ10cm程の凝灰質泥岩、土器、陶器、磁器、17~19C代で7C多い	
SX-3	2C	90×88×0~2	円	紙状になった底板の木質・粘土質の痕跡、桶の痕跡	
SX-4	3C	112×106×0	方	南辺中央の30cmを除き幅8~14、深さ8~18cmの溝が残る、陶器、漆器、18C	
SX-5	5C	218×156×27	楕円	SX-6~8と同様の埋積土で表面等に僅かに酸化層を認める。これらと同様に流し・風呂場の排水溝	
SX-6	4·5C	210×170×23	不整	南東でSX-7を切る。全体を酸化層が覆う。流し・風呂場の排水溝	
SX-7	5C	[90]×80×16	不整	西がSX-6に切られる。酸化層が壁底面を覆う。流し・風呂場の排水溝	
SX-8	5C	112×45~100×8~14	不整	壁に酸化層、流し・風呂場の排水溝	
SX-9	1A	[410]×[380]×14~50	一	幅30~70、深さ14~50cmの溝状の掘り込みが蛇行しながら不規則に連なる。西と南は地区内、地割れや植物の根等によるものでは無いが、人為的行為とも断定し難い。SI-1に切られる、埋積土より近代遺物が多数出土し、中止、近代のゴミ穴	
K-4	3B	78×56×30	長方	SX-5に近似の埋積土上位に22×16cmの河原石が1箇遺存、下位より磁器蓋、18C	
K-5	2C	[132]×[87]×[80]	?	調査区北西に所在、北側は調査区外に延びる、埋積土より近代遺物が多数出土し、中止、近代のゴミ穴	
K-8	7A·B	223×122×70	楕円	東西に長軸をもつ楕円形、東に2段の階段状施設、確認面より底面まで焼土主体の層で埋め戻し、近代遺物多数出土、空襲後の廃地	
K-9	2B·C, 3C	114×40~58×15	不整楕円	焼土中より、明治中期の便器等近代遺物出土、空襲後のゴミ穴	

第8表 出土遺物一覧表（1）

出土地点	出土遺物	古代			古・現代			不明			総計	
		破片	鏡	筒形	小片	破片	鏡	筒形	小片	破片	鏡	
SK-4-P64	磁器	切妻口縁・直・美		1	1				1			
SK-4-P67	磁器	三足窯・肥前	F-177		1	1				1		
SK-4-P176	土器	内フリカケ・在地		1	1				1			
SK-4-P177	土器	白釉・肥前	F-67		1	1			1			
P-43	陶器	火照耐・直・美		1	1				1			
P-44	陶器	火照耐・直・美		1	1				1			
P-45	陶器	火照耐・直・美		1	1				1			
P-46	土器	内フリカケ・在地		1	1				1			
P-47	陶器	火照耐・肥前		1	1				1			
P-26	陶器	火照耐・直・美		1	1				1			
P-83B	土器	内フリカケ・在地	SK-2-2	1	1				1			
SK-2	土器	内フリカケ・在地	P-83B上	1	1				1			
陶器	内野皿・直・美			1	1				1			
SK-3	土器	内フリカケ・在地		1	1				1			
SK-4	土器	内平底盤(3)・肥前		1	1				1			
SK-6	土器	内フリカケ・在地		2	2				2			
SK-7	土器	内野皿・直		1	1				1			
陶器	内野皿・直・美			1	1				1			
SK-8	土器	内付輪・直・美		2	2				2			
SK-9A	土器	内フリカケ・在地		4	4				4			
陶器	内付輪・直			1	1				1			
SK-10	土器	内付輪・在地		1	1				1			
陶器	内付輪・直			1	1				1			
SK-11	土器	内付輪・直		2	2				2			
SK-12	土器	内付輪・直		1	1				1			
陶器	内付輪・直・美			1	1				1			
SK-13	土器	内付輪・直		2	2				2			
SK-14	土器	内付輪・直		4	4				4			
SK-15	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-16	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-17	土器	内付輪・直		2	2				2			
SK-18	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-19	土器	内付輪・直		2	2				2			
SK-20	土器	内付輪・直		3	3				3			
SK-21	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-22	土器	内付輪・直		2	2				2			
SK-23	土器	内付輪・直		3	3				3			
SK-24	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-25	土器	内付輪・直		17	17				17			
SK-26	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-27	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-28	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-29	土器	内付輪・直		3	3				3			
SK-30	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-31	土器	内付輪・直		2	2				2			
SK-32	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-33	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-34	土器	内付輪・直		2	2				2			
SK-35	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-36	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-37	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-38	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-39	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-40	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-41	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-42	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-43	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-44	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-45	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-46	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-47	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-48	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-49	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-50	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-51	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-52	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-53	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-54	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-55	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-56	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-57	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-58	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-59	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-60	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-61	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-62	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-63	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-64	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-65	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-66	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-67	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-68	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-69	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-70	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-71	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-72	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-73	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-74	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-75	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-76	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-77	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-78	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-79	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-80	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-81	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-82	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-83	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-84	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-85	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-86	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-87	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-88	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-89	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-90	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-91	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-92	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-93	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-94	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-95	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-96	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-97	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-98	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-99	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-100	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-101	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-102	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-103	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-104	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-105	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-106	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-107	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-108	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-109	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-110	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-111	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-112	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-113	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-114	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-115	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-116	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-117	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-118	土器	内付輪・直		1	1				1			
SK-119	土器	内付輪・直		1	1							

第8表 出土遺物一覧表（2）

出土地点	出土遺物	古・現代					不明	総計
		破片	箇	箇	箇	箇		
SK-9A	縦器	瓦付窓・肥前	2				2	
		瓦付窓物置・肥前	1				1	
		瓦破物置・肥前	1				1	
		瓦不明・肥前	1				1	
		瓦番付・肥前	1				1	
SK-9B	陶器	瓦剥離・在地			1		1	
	土器	瓦付・在地	2				2	
	陶器	瓦付丸窓・繩・素	4				4	
	陶器	瓦付・繩・美	1				1	
SK-10	縦器	瓦破瓶・肥前	1				1	
	縦器	瓦通水管・古窓水	1				1	
	土器	瓦付・在地	2				2	
	土器	瓦付・在地	2				2	
	陶器	瓦・明・在地	1				1	
SK-11	縦器	瓦付・繩・美	5				5	
	陶器	瓦脚脚付酒造付・信楽	1				1	
	陶器	瓦・在地	1				1	
	縦器	瓦付丸窓・肥前	2				2	
	縦器	瓦付父母窓・肥前	1				1	
SK-12A	土器	瓦付・在地	1				1	
	土器	瓦付・在地	1				1	
	陶器	瓦付土器灰瓦・江戸期	1				1	
	陶器	瓦付・不明	1				1	
	陶器	瓦呑み瓶・招福在地・青白釉・燒締	1				1	
SK-12B	土器	瓦板・石付開地	2				2	
	土器	瓦板・在地	1				1	
	陶器	瓦付土器・在地	5				5	
	陶器	瓦付(明治)・繩・美	1				1	
	縦器	不明・繩・美	2				2	
SK-13	縦器	瓦付窓各付窓・肥前	1				1	
	縦器	瓦付脚付・肥前	1				1	
	縦器	瓦付御神香添付・肥前	1				1	
	金属	小刀・明	1				1	
	土器	瓦付・在地	1				1	
SK-14	縦器	瓦付・小中窓・不明	1				1	
	土器	瓦付・在地	1				1	
	縦器	瓦付・在地	2				2	
	陶器	瓦付・繩・美	1				1	
	陶器	陶質A・繩・美	1				1	
SK-15	陶器	街路日・繩・美	1				1	
	縦器	合半抱持付・繩・美(影響)	1				1	
	縦器	縦・明付	1				1	
	縦器	瓦付・高台窓	1				1	
	縦器	小刀・明・肥前	1				1	
SK-16	縦器	瓦付窓物置・肥前	1				1	
	縦器	瓦付・繩・美	1				1	
	縦器	瓦付・不明・加藤西道付	1				1	
	縦器	瓦付窓付・肥前	1				1	
	縦器	瓦付窓反側付・繩・美	1				1	

出土地点	出土遺物	古・現代					不明	総計
		破片	箇	箇	箇	箇		
K-5	縦器	坏・断・美、瓦込「水門付」					1	1
石製品	研・宮城?						1	1
K-6	縦器	瓦付長窓・肥前、燒窓	1				1	1
石製品	袖子・繩・美						1	1
K-7	縦器	瓦付長窓・肥前、焼窓	1				1	1
石製品	右板(スレート):若城?						1	1
	石坐(櫻鶴):不明						1	1
K-8	縦器	コバルト染付小便					2	2
	コバルト・繩・美						3	3
	コバルト染付小便						6	6
SA-BG7	縦器	瓦付手すり:繩・美	1				1	1
縦器	瓦付手すり:肥前・肥前・波佐見	2	2	4			4	4
	柴村二角高台羽根:肥前						1	1
	柴付(素面):肥前	1					1	1
	柴付(素面):肥前	1					1	1
	柴付(手すり):肥前	1					1	1
	柴付(手すり):肥前	1					1	1
	鋼板小箱:小便・繩・美	1					1	1
	鋼板小箱:小便・繩・美	1					1	1
	鋼板小箱:小便・繩・美	1					1	1
	石製品:不明						1	1
OB-er	土器	行火:在地					1	1
	不明:在地						1	1
陶器	土瓶:在地	1					1	1
	漆付小瓶:繩・美	1					1	1
	灰釉利口:繩・美	1					1	1
	灰釉利口:繩・美	1					1	1
	灰釉利口:繩・美	1					1	1
	灰釉利口:繩・美	1					1	1
	縦器	灰釉利口:肥前	1				1	1
	漆付利口:肥前	1					1	1
	無釉利口:肥前	1					1	1
	調査区内	土器	カワラケ:在地	2	2	1		3
		砂塔:在地	4		4		4	
		砂塔:在地	2		2		2	
	縦器	胡毛細口:肥前・唐津	1				1	1
		なまこ・灰土瓶:也同	1				1	1
		柴付(素面):肥前	1				1	1
		柴付(素面):七面瓶	1				1	1
		灰釉利口:肥前	1				1	1
		灰釉利口:肥前	1				1	1
		灰釉利口:肥前	1				1	1
		灰釉利口:肥前	1				1	1
		植木付:在地					2	2
		丸窓付染付瓶:肥前	2				2	2
		染付白底瓶:肥前	1				1	1
		安竹輪毛瓶:肥前	1				1	1
		安竹輪毛瓶:肥前	1				1	1
		染付小瓶:肥前	1				1	1
		染付利口:肥前	1				1	1
		安竹輪:肥前	1				1	1
		男物小瓶:肥前	1				1	1
		子供茶碗:肥前	1				1	1
		子供茶碗:肥前	1				2	2
	総計		256	21	271	29	7	368
			0	8	315	0		

第4章 釜神町遺跡の歴史的展開

はじめに

釜神町遺跡は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構・遺物が展開する複合遺跡として周知されている遺跡であり、特に近世においては、水戸城下町の武家地に係る遺構・遺物が包蔵される数少ない遺跡として注視されている。

一方、既往の調査の大半がトレンチ方式による試掘・確認調査であったため、得られる情報は限定的で、本遺跡の土地利用は詳らかでなかった。こうした中、今次調査は本遺跡において面的調査を実施した数少ない事例であるとともに、初の本発掘調査報告書となる。

そこで本章では、本遺跡周辺における地域史復元の一助とするべく、今次調査の土地利用の変遷を改めて纏めるとともに、主要遺構である近世建物跡を中心とする近世武家屋敷地の歴史的展開について、考古学的所見とともに古地図資料の所見を交えて述べ、現時点における本遺跡の総括とするものである。

(間口)

第1節 土地利用の概略

縄文時代 今次調査では遺構・遺物とも認められなかつたが、50 m程南側に位置する第2地点第6次調査では、土坑内に埋設された後期の土器が出土している。

弥生時代 この時期の遺構・遺物については、今次調査はもとより、本遺跡における既往の調査でもまだ確認されていない。

古墳時代 今次調査では前期（4世紀）の堅穴建物跡（SI-1）が1軒確認されるとともに、少量の土師器が出土した。SI-1は埋没途中にロームで人為的に埋め戻されていたことから、埋没しきらない時期に至近で何らかの土木行為が行われたものと考えられる。

奈良・平安時代 今次調査では平安時代中葉（10世紀後半）の土坑（SK-1）が1基確認された。堅穴建物跡は認められなかつたが、第2地点第6次調査では該期の堅穴建物跡が4軒程確認されており、集落の広がりが推測される。

中世 この時期の遺構・遺物とも確認されなかつたが、第2地点第6次調査では南北に延びる溝状遺構が確認され、当地区周辺で中世の土地利用があつたことが窺える。

近世 当地区周辺は近世当時の地割が良く残されるとともに、近代以後もそのまま居住された家も多く、古地図との照合が可能な地域である。当該地もその一つで、水戸藩士である大岩家の後裔の方々が近年まで居住されていた。

現況より推測される敷地の平面規模は、南北約30 m（間口）、東西は東の通りから奥まで約70 mの長方形で、約2,100 m²（約640坪）となる。調査地は、その北東隅の約335 m²である。近世の土地利用の詳細については次節で述べることとしたい。

近代 前述の通り、明治以降も継続して大岩家のご子孫が住まわれて來たが、昭和20（1945）年8月2日の水戸大空襲により一帯も被災し、大部分の建物が焼失したと伝えられる。K-8とした近代遺構等にその痕跡が認められた。また、空襲以降、西側の敷地が親族・縁者に分割譲渡され、現在の居住状況になったとのことである。

(水野)

第2節 近世武家屋敷の展開

今次調査で得られた考古学的情報は古墳時代から近代まで多岐にわたるが、なかでも本地區における土地利用の変遷を窺うための重要な成果として、調査区全面で確認された190基の近世ピット群が挙げられる。

第3章第2節で述べたように、これらのピット群の覆土や軸線、遺物の状況等の観察から、7棟(SB-1～SB-7)の近世建物跡を抽出することができた。これらの近世建物跡は相互に切り合いや重複が見られるとともに、軸線の傾きにも偏差が認められる。残念ながらピット出土の遺物はSB-4を除いて検出されなかったが、各建物跡に伴うと思われる遺構から出土している遺物の年代観を参照すれば、建物跡の概ねの時期的変遷を復元していくことが可能である。

そこで、上記のような観点から各遺構・遺物の検討を加えた結果、後述のように3時期の変遷を復元・設定することができた。本節では、この3つの時期変遷を近世Ⅰ期、近世Ⅱ期、近世Ⅲ期と命名するとともに、各時期の様相を述べ、近世武家屋敷における土地利用の展開を辿っていくこととしたい。

近世Ⅰ期(17世紀前半～後半／第15図) 本時期の遺構は調査区南西端で確認されている建物跡1棟(SB-5)のみで、土地利用は比較的薄い様相が窺える。調査区南西端ではSB-5・6・1が重複し、一見複雑な様相を呈するが、切り合い関係からSB-5が最も古い建物跡となる。

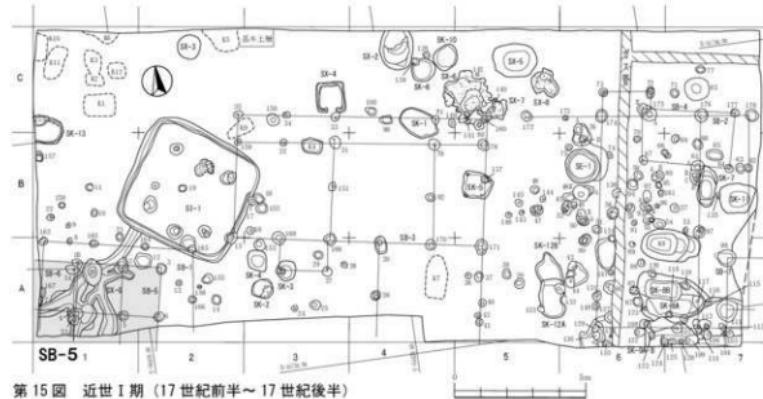
SB-5から遺物は出土していないが、今次調査では17世紀前半代の遺物が一定量出土しており、本地區において17世紀代の土地利用がなされていた可能性が高いこと、SB-5を切るSB-6をはじめとする掘立柱建物群に17世紀後半～18世紀前半の年代観(近世Ⅱ期)が与えられることから、17世紀前半～後半に年代観を設定した。

近世Ⅰ期における当該地区の様相を窺う絵画資料として、正保～明暦年間(1644～1658)の城下町を描いた「水戸城下絵図」(水戸市立博物館所蔵)がある。本図を参照すると、当該地区は佐野小口衛門の屋敷地となっていることが窺える(第18図)。すなわち、SB-5は佐野家の武家屋敷地であった時代の遺構ということになる。SB-5の構造は掘立柱建物跡で、床束柱跡と思われるピットを備える。各ピットの間隔は概ね5尺5寸～6尺の間で推移するものの、一定ではない。また、瓦の出土がないことから茅葺き屋根であったと推測される。比較的簡素な構造が想定される一方、床束柱を有する建物であることから、母屋等の主要な居住施設を想定できよう。

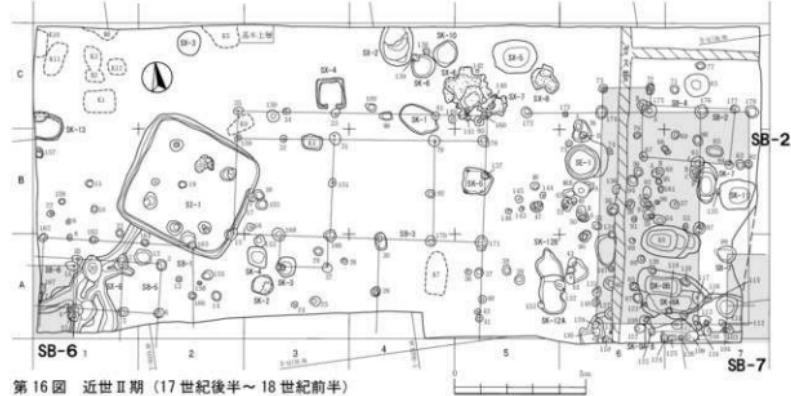
近世Ⅰ期は、初代藩主徳川頼房が実施した寛永2(1625)～同15(1638)年の水戸城下大規模普請直後の、水戸藩の初期城下町が展開した時期に相当する。水戸市域における近世遺跡において、当該時期の遺構・遺物が検出されること自体が少なく、SB-5は城下町の初期様相を窺う稀少な武家の建物跡に位置づけられよう。

なお、SB-5の軸線はN-20°-Eを呈しており、今後、周辺の調査で同様の傾きを呈する遺構を抽出していくことで、年代観の検証を含め、更なる情報の蓄積がなされることを期待したい。

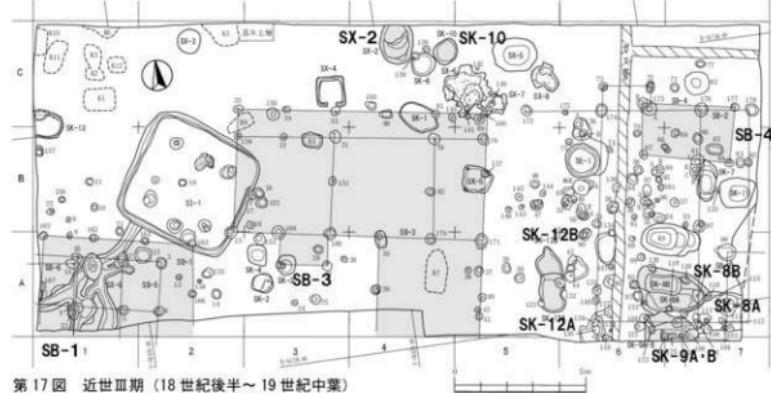
近世Ⅱ期(17世紀後半～18世紀前半／第16図) 本時期の建物跡は3棟(SB-2, SB-6, SB-7)が抽出できた。これらの建物跡はいずれも掘立柱構造であること、傾きがN-8°-E～N-9°-Eに収斂することが特色として挙げられる。



第15図 近世I期（17世紀前半～17世紀後半）



第16図 近世II期（17世紀後半～18世紀前半）



第17図 近世III期（18世紀後半～19世紀中葉）

本時期では、近世Ⅰ期でみられたSB-5がSB-6に建て替えられるとともに、Ⅰ期では空閑地であった調査区東側にSB-6と同軸のSB-2・SB-7が建つという、大きな土地利用の変化が生じた。このことは、敷地内はもとより、敷地外の土地利用にも相応の変化が生じたことを想定させる出来事である。

SB-2は梁間2間×桁行4間の規模で、北側に半間×1間、東側に1間×1間の張り出しを有する掘立柱建物である。1間の尺寸は梁間が1間=6尺、桁行が1間=6尺6寸を測り、一定ではない。SB-2に東接するSB-7は6尺5寸の間隔を有する2基のピットのみしか確認されていないものの、ピット上面の直径は70cm、確認面からの深さは80~100cmを測る大型の掘方を有し、相応の規模の建物としたい。瓦の出土はなく、茅葺き構造と推定される。

こうした敷地内の土地利用の大きな変化にどういった原因があるのかは不明であるが、この時期に大岩家が創始されていることは注目すべきである。

大岩家は、『水府系纂』（公益財団法人徳川ミュージアム所蔵）によれば大岩與五衛門陸次なる者が初見であり、3代後の與八次孝が明和6(1769)年に没し、無嗣により絶家となった。

現在の大岩家は、享保19(1734)年、陸次の次男である大岩伴次郎次蔵が藩に登用され、本家から分かれて立家したのが創始とされる。禄高は不明だが、切米取であり知行（領地）はない。藩庁での役職は物書、松平頼順（4代藩主宗堯庶長子）附の右筆、小普請組、歩行士等を歴任し、晩年に歩行目付次座格となる。これらの役付の分限からみれば下士層相当とみてよい。次蔵は宝暦10(1760)年に没した。その後の家督は2代與吉次昌（文化11(1814)年没）、3代鍋次郎陸昌（天保9(1838)年没）、4代伴次郎次忠（没年不詳）と続く。

このように、近世Ⅱ期はちょうど分家大岩家初代次蔵が立家した時に該当し、この時期に佐野家から大岩家へと屋敷替えが行われた可能性がある。こうした可能性を、当該时期における土地利用の変化の内的要因の一つとして掲げておきたい。

近世Ⅲ期（18世紀後半～19世紀中葉／第17図） 本時期の建物跡は3棟(SB-1, SB-3, SB-4)となる。前代の建物と大きく異なる特色は、近世Ⅰ・Ⅱ期が全て掘立柱建物だったものが、近世Ⅲ期になると礎石建物となる点である。SB-1・3でみられる硬化したピットは礎石の根固め痕と理解してよい。また、本期の建物の軸線はN-11°-Eにほぼ収敛することも特色である。いずれの建物からも瓦は出土せず、茅葺き構造だったと推測される。

SB-1は近世Ⅰ期にあってはSB-5が、Ⅱ期にあってはSB-4が建っていた場所に占地しており、近世を通じて調査区西側に母屋等の主要な建物が展開していたことが窺える。また、Ⅱ期に新たに建てられたSB-2・7はⅢ期には既になく、その場所にはSB-4という2間×1間のやや特異な掘立柱建物が建てられる。第3章第2節で記したように、鬼門（北東）側のピットと裏鬼門（南西）側のピットから同一個体の白磁片が検出されるなど、埋納遺構を窺わせる出土状況を示している。性格の特定は困難であるが、氏神等の小祠を覆う（結界する）簡素な建物などを想定できるのではなかろうか。屋敷地全体からみてSB-4が鬼門方向に占地することもこうした想定を補強する情報源となろう。

一方、SB-2の南側には、廃棄土坑とみられるSK-8A・B, 9A・B, 12A・Bが展開する。江戸遺跡ではこうした廃棄土坑は屋敷の裏空間、すなわちケの空間に設けられることが一般的である。本地区においても調査区東側がケの空間の一部であったと考えてよいのではなかろうか。

SB-1とSB-4の中間に、礎石建物SB-3が建てられる。本建物は2×2間の部屋が二つ

並び、その東側に 1×2 間の部屋あるいは廊下が連結し、北側に縁の間を設ける。南側の 2×2 間の張出しが式台であろうか。屋敷地内のメイン通路は調査区外ではあるが、南側に東西方向で走っていたとみられ、SB-3の式台はこの通路に面していたものと考えられる。

詳細な構造はなお検討の余地はあるものの、SB-3は下土層の武家屋敷を構成する建物遺構が全面検出された初の事例であり、水戸藩における武家の建物を窺う好例として位置づけられる。

近世III期の古絵図は「水戸地図」(文政9(1826)年作成、天保元(1830)年写／公益財団法人徳川ミュージアム所蔵)、「水戸城下絵図」(天保10(1839)年作成／水戸市所蔵)、「水府家御屋敷割図」(文久元(1861)年作成／茨城大学図書館所蔵)、『改訂 水戸の町名』(1985年、水戸市役所)所収の安政年間の水戸城下地図等が知られる。ここでは安政年間の「水戸城下地図」の遺跡周辺の町割を掲げた(第19図)。同図と、近世I期の町割である第18図とを比較すると、町割や居住者に大規模な変化が生じていることが指摘できる。

すなわち、第18図では佐野家屋敷前の通り(現在の市道上市239号線、本書では神崎町道と仮称)の北側に浄閑院が占地し、袋小路になるとともに、佐野家の斜向かいT字路があり、備前町方面に抜ける東西の道が描かれている。一方、第19図では浄閑院は描かれておらず、神崎町道は鉤型にクランクして北に隣接する天王横町に直結するとともに、T字路は廃絶され屋敷地に取り込まれている。

『新編常陸国誌』によれば、浄閑院は延宝5(1677)年に移転し、その跡地に牛頭天王社が設けられたとある。その牛頭天王社も天保15(1844)年、9代藩主斉昭の命により上河内町に移転となつたため(現在の素鷺神社)、第19図では「天王社跡」という表記が見られる。浄閑院(心



第18図 遺跡周辺の町割(正保～明暦年間)
(○が第16地点)



第19図 遺跡周辺の町割(安政年間)
(○が第16地点)

光寺）は家康五男の武田信吉の墓所（後に瑞龍山へ改葬）が設けられた寺院であり、牛頭天王社は中世江戸氏の時代に水戸城内に勧請され、移転を重ねてきたものである。いずれも由緒ある寺社であることから、こうした寺社の占地を大規模に縮小し屋敷地を拡大することは考えにくく、第18図から第19図の町割の大きな変化は、牛頭天王社が移転した天保15(1844)年以降に求められるものと解釈したい。『水戸市史』中巻（一）所収の元禄期の町割図にも牛頭天王社と思しき敷地が占地し、第18図の町割をほぼ踏襲していることも、上記解釈を補完する根拠となろう。

こうして天保期々近世Ⅲ期に改変されたと思われる町割は、近代以後も変わることなく踏襲され、現在の町割へと受け継がれた。すなわち現在の遺跡周辺の景観は、第18図から第19図へと町割が変化した近世Ⅲ期に求められるのである。

おわりに 一課題と展望—

今次調査では古墳時代から近代に係る様々な遺構・遺物が確認され、長期間に及ぶ土地利用の展開を辿ることができた。改めて今次調査の成果を編年的にまとめると次のようになる。

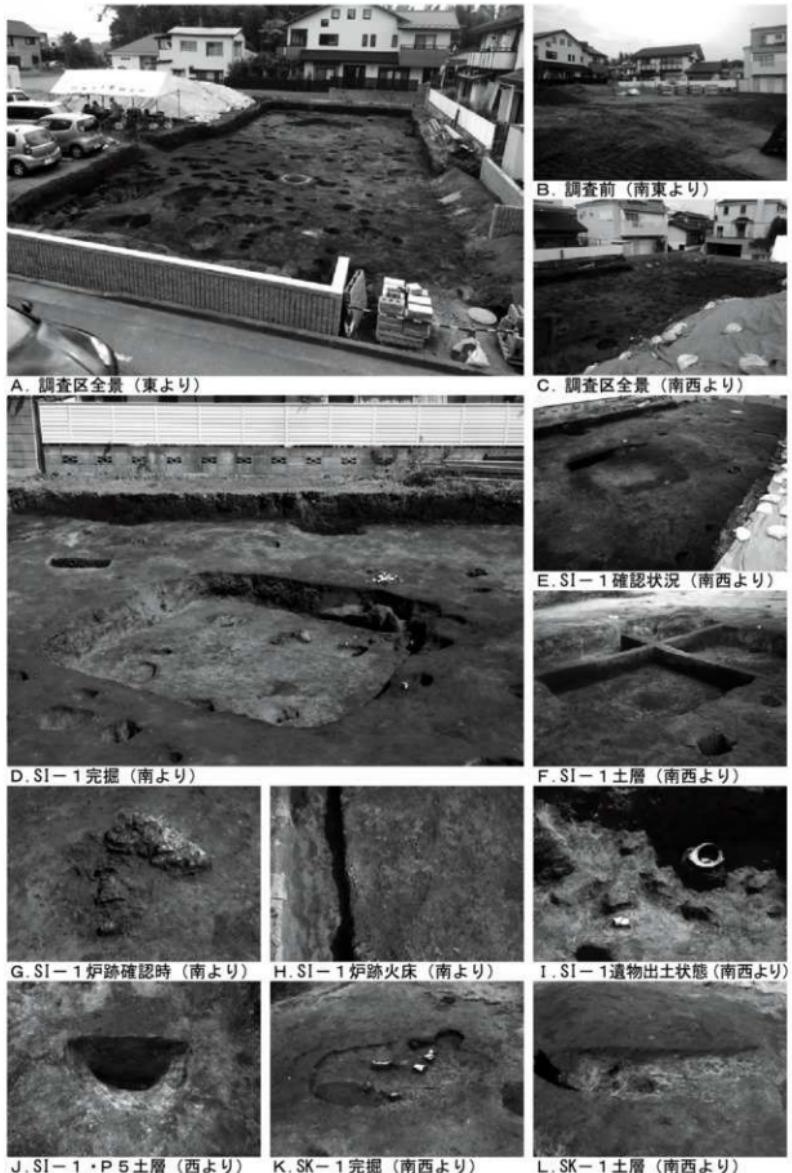
- ① 古墳時代前期（4世紀）：竪穴建物が1基確認された。
- ② 奈良・平安時代（10世紀後半）：楕円形土坑が1基確認された。
- ③ 近世Ⅰ期（17世紀前半～17世紀後半）：掘立柱建物が1基確認された。水戸藩士の佐野家が当該地区に屋敷地を構えた時期に比定される。
- ④ 近世Ⅱ期（17世紀後半～18世紀前半）：掘立柱建物が3基確認された。この時期に水戸藩士の大岩家が当該地区に屋敷地を構えたものと想定される。
- ⑤ 近世Ⅲ期（18世紀後半～19世紀中葉）：礎石建物が2基、小祠に推定される掘立柱建物が1基確認された。この時期に掘立柱建物→礎石建物への構造変化が認められるとともに、神崎町、天王町、釜神町一帯の町割にも大きな変化が生じるなど、屋敷地の内外を含めた土地利用の大きな変化が生じた。
- ⑥ 近代：近世の建物跡は廃絶し、風呂場等の水場に関連する遺構が確認された。ウラ空間に該当するものと思われる。

以上、①～⑥の6時期に及ぶ土地利用が見られたのであるが、第1節で述べたように、周辺地区的調査において、今次調査で認められなかった绳文時代や中世等の土地利用の痕跡が検出されていることから、本調査区でもこうした時代における人々の活動があったことは確実である。また、①②で確認された遺構は単独で検出されたが、今後は周辺の遺構の展開を注視していくことで、遺構の性格を明らかにしていく必要があろう。

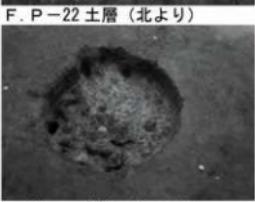
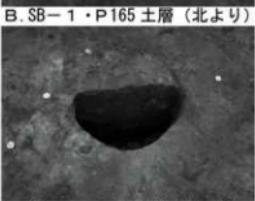
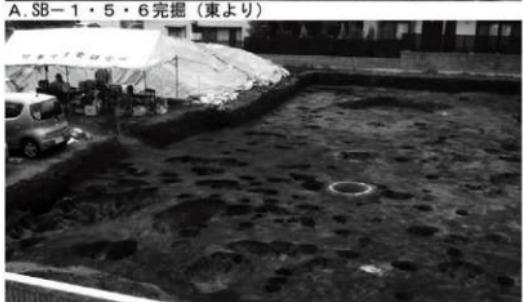
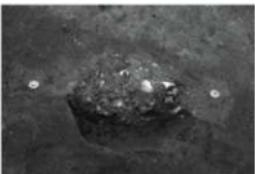
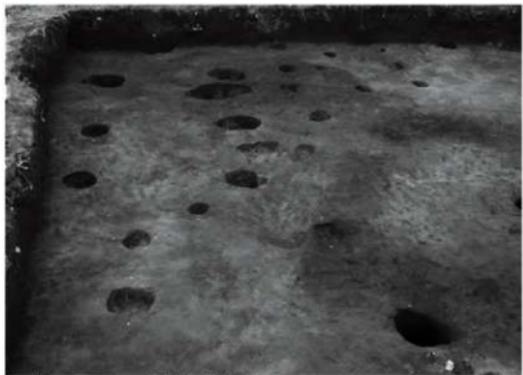
近世の土地利用については、Ⅰ期からⅢ期までの時期を設定し、各時期に相当すると思われる遺構を可能な限り抽出し、編年的な叙述を試みた。時期設定の判断根拠は必ずしも十分ではないものの、現時点で与えられている諸情報を可能な限り集約し、積極的に地域の歴史を復元していくことは、今後の釜神町遺跡の理解を促進していくうえで有用であると考える。本報告書は水戸城下町の考古学的研究の嚆矢となるものであり、今後、調査の進展により更なる検討が加えられ、地域の歴史が実り豊かに叙述されていくことを期待したい。（閉口）

写 真 図 版

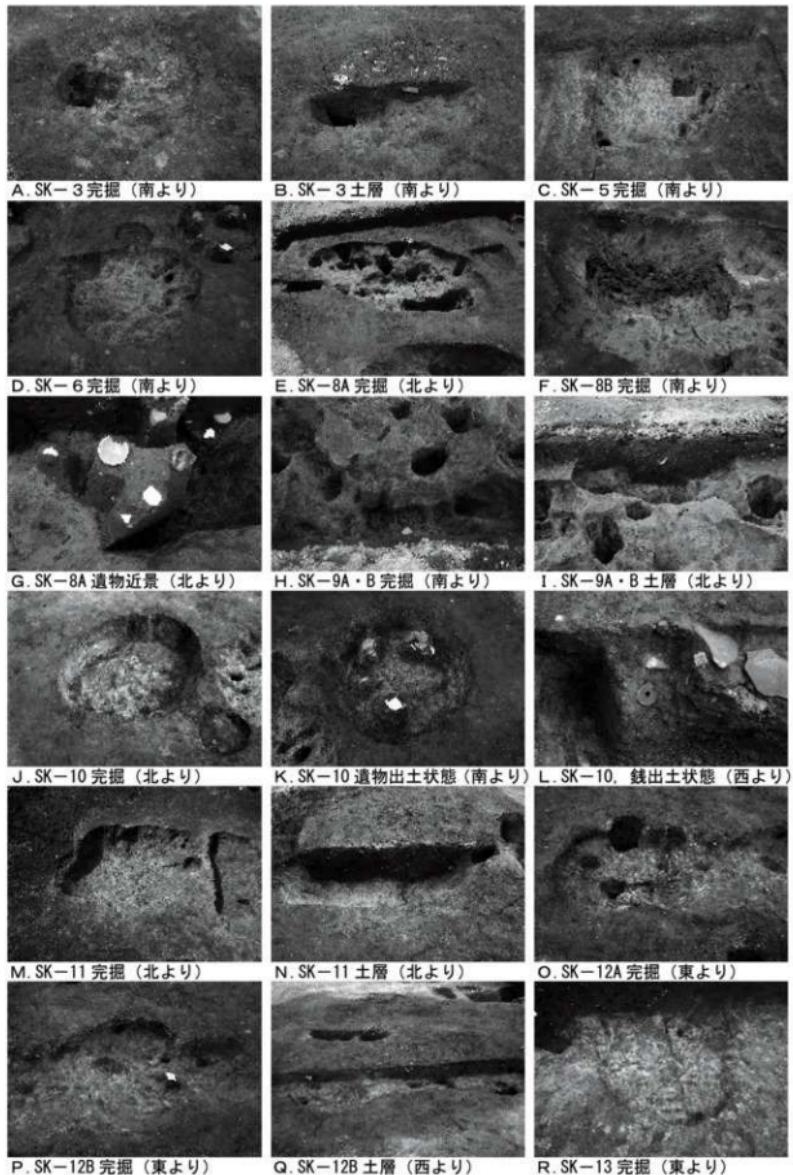
写真図版 1



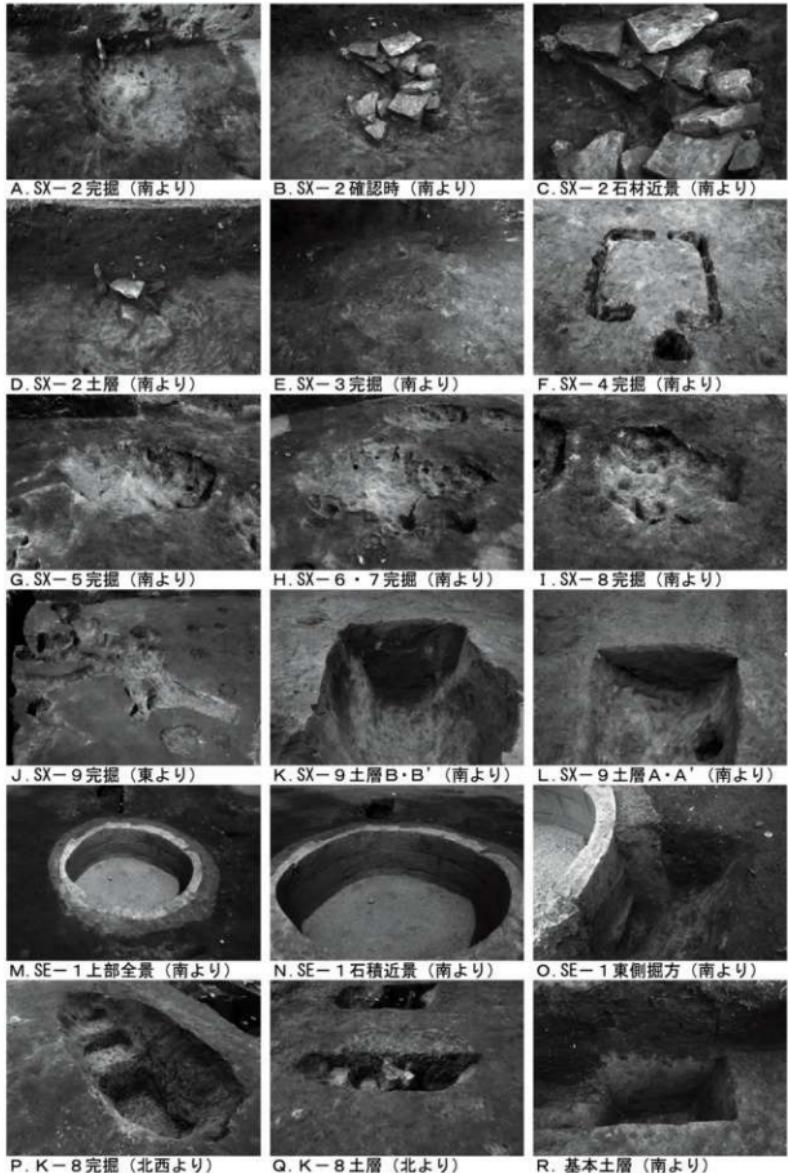
写真図版 2



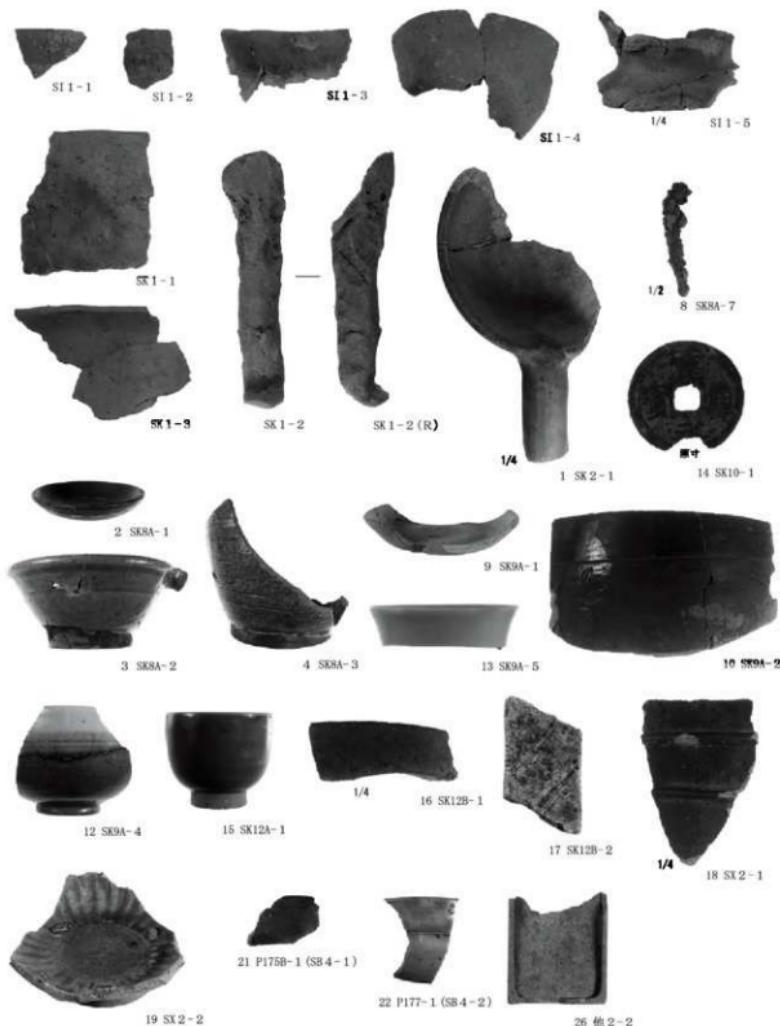
写真図版 3



写真図版 4



写真図版 5



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまがみちょういせき (だいじゅうろくちてん)							
書名	釜神町遺跡（第16地点）							
副書名	共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第98集							
編集者名	水野順敏							
著者名	水野順敏・堺清貴・閑口慶久							
編集機関	株式会社 日本産業史研究所	所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112番地 ☎0287(93)0711					
発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064-1（埋蔵文化財センター） ☎029(269)5090					
発行年月日	2018（平成30）年2月20日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯 °'\"	東経 °'\"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
釜神町遺跡	茨城県水戸市天王町872	08201	020	36° 22' 28"	140° 27' 43"	自2017/7/25 至2017/8/20	335	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
釜神町遺跡 (第16地点)	集落跡	古墳	竪穴建物跡	土師器		既往の調査では、縄文時代、平安時代、近世の遺構が確認されていたが、今次調査では、古墳時代前期の竪穴建物跡と平安時代の土坑が確認された。近世の遺構・遺物も比較的良好な資料が得られた。		
		平安	土坑	土師器				
		近世以降	掘立建物跡、小穴、土坑、性格不明遺構、井戸跡	陶器、磁器、土器、石製品、金属製品				

水戸市埋蔵文化財調査報告第98集

釜神町遺跡（第16地点）

—共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 平成30年2月20日

発行 平成30年2月20日

編集 株式会社 日本産業史研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 下野印刷 株式会社